

一般国道10号

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

桐ヶ迫遺跡

峯添遺跡

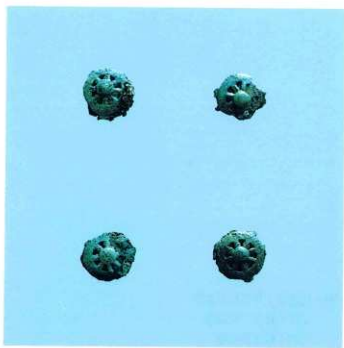
1994年

大分県教育委員会



調査遺跡空中写真（南西方向より）

手前より正布ヶ追遺跡、峯添遺跡Ⅱ区、同Ⅰ区、桐ヶ追遺跡



桐ヶ迫遺跡1号墓出土遺物

上段：錫杖（杖頭部）

下段：輪宝型金物

序

大分県教育委員会は、昭和61年から国道10号線宇佐道路建設に伴い埋蔵文化財の調査を実施しております。宇佐道路は、すでに完成した中津バイパスと宇佐別府道路との間を繋ぐ北大バイパスの一区間として建設が計画されたものであり、交通体系整備は県民の待望する事業の一つとして徐々に実現化されています。

しかし、路線内に所在する埋蔵文化財についても同様に重要であり、国民・県民の共有財産として十分に保護措置が図られるべきものであります。

この点については道路建設の計画段階から協議を重ね、できるだけ遺跡保存の方向をとってまいりましたが、やむを得ず路線内にかかる遺跡について発掘調査を実施してまいりました。

調査では、古墳、住居跡、溝、炭窯、近世墓地など居住、生業、葬祭の痕跡を示す様々な遺構、貴重な遺物を発見しました。これらは、当時の生活や社会の背景を知る上で重要な資料となるものです。

発掘調査の結果につきましては、埋蔵文化財の記録保存という責任を全うすべく、昨年度から順次報告書を刊行しております。昨年度は報告書刊行の初年度にあたり、笠松遺跡の報告を行いました。今年度は、桐ヶ迫遺跡・峯添遺跡について報告いたします。

本書が歴史遺産に対する現解を深める資料としてはもとより、学術資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで多くのご指導をいただきました諸先生方をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位および地元の方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 6 年 3 月

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

例 言

- 1 本書は一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆者は次のとおりである。

第1、2、3、4、6章	小林 昭彦
第3章2（竪穴状遺構と遺物）	綿貫 俊一
第4章2	小柳 和宏
第5章1	小池 裕子
2	田中 良之
	金 宰賢
- 4 遺物の実測、トレース、写真撮影などの作業は、小林、友岡信彦、吉武牧子が主体になり、あるいは補佐して行った。また出土銅銭については、大野町教育委員会の後藤幹彦氏に図版の作成とご教示を頂いた。

英文要旨はFR.Leonard R.Lavalleeに指導を受けた。
- 5 本書の編集は、小林が行った。

目 次

第1章 調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
3 調査の経過	3
4 調査の方針と方法	4
第2章 調査遺跡の立地と歴史的環境	6
第3章 発掘調査の結果	8
1 桐ヶ迫遺跡の遺構と遺物	8
2 峯添遺跡の遺構と遺物	46
第4章 遺構と遺物の検討	78
1 近世墓地について	78
2 峯添遺跡近世墓地の骨蔵器について	80
第5章 自然科学的調査の成果	82
1 桐ヶ迫遺跡2号墳出土須恵器の脂質分析について	82
2 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地出土人骨について	87

SUMMARY

報告書抄録

挿図目次

第1図	宇佐道路路線内遺跡位置図	5
第2図	宇佐道路周辺遺跡分布図	7
第3図	桐ヶ迫遺跡・周辺地形図	9
第4図	桐ヶ迫遺跡遺構分布図	10
第5図	2号墳・周辺地形図	11
第6図	2号墳墳丘土層断面図	12
第7図	2号墳墳丘内須恵器出土状態	12
第8図	2号墳羨道部土層断面図	14
第9図	2号墳石室実測図	15
第10図	2号墳出土遺物実測図(1)	19
第11図	2号出丘土遺物実測図(2)	20
第12図	2号墳出土遺物実測図(3)	21
第13図	2号墳出土遺物実測図(4)	22
第14図	2号墳出土遺物実測図(5)	23
第15図	2号墳出土遺物実測図(6)	24
第16図	2号墳出土遺物実測図(7)	25
第17図	灰原土層断面図	26
第18図	溝1、2実測図	27
第19図	灰原出土須恵器実測図	28
第20図	桐ヶ迫遺跡近世墓地全体図	34
第21図	近世墓周辺墓石位置図	35
第22図	1号墓実測図	36
第23図	2号墓実測図	37
第24図	3号墓実測図	38
第25図	墓標1・2実測図	39
第26図	1号墓出土輪宝形金物復元図	40
第27図	墓標3実測図	40
第28図	1号墓標拓影	41
第29図	2号墓標拓影	42
第30図	3号墓標拓影	43
第31図	1号墓出土遺物実測図	44

第32図	近世墓出土銅銭拓影	45
第33図	峯添遺跡・周辺地形図	47
第34図	峯添遺跡Ⅰ区遺構分布図	48
第35図	Ⅰ区竪穴状遺構実測図	50
第36図	Ⅰ区竪穴状遺構上層出土遺物実測図	51
第37図	Ⅰ区竪穴状遺構出土石器・関連資料実測図	52
第38図	Ⅰ区炭窯実測図	53
第39図	Ⅰ区炭窯・周辺出土遺物実測図	53
第40図	峯添遺跡Ⅱ区遺構分布図	55
第41図	Ⅱ区1号竪穴実測図	56
第42図	Ⅱ区2号竪穴実測図	57
第43図	Ⅱ区3号竪穴実測図	58
第44図	Ⅱ区4号竪穴実測図	59
第45図	Ⅱ区炭窯実測図	59
第46図	Ⅱ区溝状遺構実測図	60
第47図	Ⅱ区火葬墓実測図	61
第48図	Ⅱ区土坑出土・表探遺物実測図	61
第49図	Ⅱ区1号・3号竪穴、ビット出土遺物実測図	62
第50図	Ⅱ区近世墓地全体図	64
第51図	Ⅱ区近世墓地整地範囲土層断面図	65
第52図	Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(1)	70
第53図	Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(2)	71
第54図	Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(3)	72
第55図	Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(4)	73
第56図	Ⅱ区近世墓地墓標実測図	74
第57図	Ⅱ区近世墓骨蔵器実測図	75
第58図	Ⅱ区近世墓3・23号墓および周辺部出土遺物実測図	76
第59図	コネ鉢変遷図	81
第60図	桐ヶ迫遺跡2号墳出土No.4坏身(569-1)とNo.6坏身(569-2)の脂質分析	85
第61図	桐ヶ迫遺跡2号墳出土No.6坏身(569-2)のステロールにおける クロマトグラフとGC-MSスペクトル	86
第62図	7号人骨頭蓋骨遺存部位	89
第63図	7号人骨遺存部位	90
第64図	8号人骨頭蓋骨遺存部位	91
第65図	8号人骨遺存部位	92

第66图	16号人骨頭蓋骨遺存部位	93
第67图	16号人骨遺存部位	94

表 目 次

表 1	桐ヶ迫遺跡 2号墳出土土器觀察表	29
表 2	桐ヶ迫遺跡灰原出土須恵器觀察表	32
表 3	桐ヶ迫遺跡近世墓出土銅銭一覽表	45
表 4	峯添遺跡Ⅱ区近世墓一覽表	77

写 真 図 版

巻頭図版 1 調査遺跡空中写真

巻頭図版 2 桐ヶ迫遺跡 1号墓出土遺物

図版 i 7号・8号人骨

図版 ii 8号・16号人骨

図版 1 調査遺跡空撮

図版 2 桐ヶ迫遺跡(1)

図版 3 桐ヶ迫遺跡(2)

図版 4 桐ヶ迫遺跡(3)

図版 5 桐ヶ迫遺跡出土遺物(1)

図版 6 桐ヶ迫遺跡出土遺物(2)

図版 7 桐ヶ迫遺跡出土遺物(3)

図版 8 桐ヶ迫遺跡出土遺物(4)

図版 9 桐ヶ迫遺跡出土遺物(5)

図版10 桐ヶ迫遺跡出土遺物(6)

図版11 桐ヶ迫遺跡近世墓地出土銅銭 (X線写真)

図版12 峯添遺跡Ⅰ・Ⅱ区

図版13 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(1)

図版14 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(2)

図版15 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(3)

図版16 峯添遺跡Ⅰ区竪穴状遺構出土石器

図版17 峯添遺跡Ⅱ区出土遺物

図版18 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地出土釘

第 1 章 調査の概要

1 調査に至る経過

宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は、北九州市から大分市に至る北大バイパス路線のうち宇佐市笠松から宇佐市山本までの間を対象としたものである。宇佐道路は中津バイパスから続く高規格道路で、さらに宇佐別府道路と接続し九州横断自動車道と合流する。宇佐道路建設に伴う調査は、昭和62年度から開始し、平成5年度にすべてを終了した。

本報告の櫛ヶ追遺跡・峯添遺跡の調査は、昭和62年度～平成2年度の4カ年間にわたり実施したものである。

遺跡の分布状況については、市域に濃密な広がりを見ることが従来より良く知られている。地形的には駅館川流域の河岸段丘、市南部の丘陵、平野部の微高地など特定の立地条件を限定しない。このような地形に展開された生活の営みは、集落、窯業、墓地、水利関連施設など具体的な内容を伴って多く発見されており、宇佐市が県内有数の遺跡集中地域であることを示している。「宇佐道路」の建設予定地内における事前の遺跡分布調査では路線全長5km間に11遺跡（のちに10遺跡に統合）が確認され、当初よりその十全な対応が望まれていた。

2 調査の組織

昭和62年度

調査委員	賀川 光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
	小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
	石野 博信（奈良県立橿原考古学研究所副所長）
	時枝 克安（島根大学助教授）
	三辻 利一（奈良教育大学教授）
	後藤 昭六（大分県教育庁文化課長）
	後藤 宗俊（同主幹）
調査主任	渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第2係長）
調査員	西 哲弘（県文化課主任）、小林 昭彦（同主事）、松本 康弘（同主事）、友岡

信彦（同囑託）、後藤 晃一（同囑託）、水松みゆき（同囑託）、吉武 敦子（同囑託）、小倉 正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師）、乙呷 政巳（同主事）、林 一也（同技師）、佐藤良二郎（同技師）

昭和63年度

調査委員

賀川 光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
三辻 利一（奈良教育大学教授）
橋 昌信（別府大学教授）
小代 基彦（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤 宗俊（同課長補佐）

調査主任

渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第2係長）

調査員

高橋 徹（埋蔵文化財第2係主査）、村上 久和（同主任）、西 哲弘（同主任）、小林 昭彦（同主任）、友岡 信彦（同主事）、吉田 寛（同主事）、後藤 晃一（同主事）、水松みゆき（同囑託）、吉武 敦子（同囑託）、山田 拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）、小倉 正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師）、乙呷 政巳（同主事）、林 一也（同技師）、佐藤良二郎（同技師）

平成元年度

調査委員

賀川 光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
瀬見 浩（広島大学教授）
水野 正好（奈良大学教授）
後藤 正二（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤 宗俊（同課長補佐）

調査主任

渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第2係長）

調査員

高橋 徹（埋蔵文化財第2係主査）、村上 久和（同主任）、西 哲弘（同主任）、小林 昭彦（同主任）、友岡 信彦（同主事）、松本 康弘（同主事）、吉田 寛（同主事）、後藤 晃一（同主事）、水松みゆき（同囑託）、吉武 敦子（同囑託）、今泉 正子（同囑託）

平成2年度

調査委員

賀川 光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）

小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
後藤 宗俊（別府大学教授）
橋 昌信（別府大学教授）
和田 晴吾（立命館大学教授）
鈴木 忠司（古代学研究所助教授）
田中 良之（九州大学助教授）
後藤 正二（大分県教育庁管理部参事兼文化課長）
林 英輝（同課長補佐）

調査主任 清水 宗昭（文化課埋蔵文化財第1係長）

調査員 坂本 嘉弘（同主査）、宮内 克己（同主査）、西 哲弘（同主任）、小林 昭彦
（同主任）、原田 昭一（同主事）、吉田 寛（同主事）、後藤 晃一（同主事）、
富田 修司（同囑託）、高松 永治（同囑託）、新宅 信久（同囑託）、丸山 啓子
（同囑託）

上記の他に、次の方々には現地指導および有益なご助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。

佐藤 興治（元大分市立歴史資料館長）、玉水 光洋（元大分市立歴史資料館学芸係長、現大分県教育庁文化課主査）、甲斐 忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）、真野和夫（同調査課長）
（敬称略）

3 調査の経過

発掘調査は既述の調査組織の編成下で行った。以下、年次ごとに該当遺跡の調査経過を示す。

昭和62年度調査

峯添遺跡の一部について試掘調査を実施し、近世墓地の墓標などを確認した。

昭和63年度調査

本年は峯添遺跡の未調査部分、桐ヶ迫遺跡について試掘調査を実施した。桐ヶ迫遺跡では丘陵下の谷部水田において遺構の確認調査を行った。試掘の結果、谷は深く開析され有機質土壌の厚い堆積を確認したが、遺物・遺構はみられなかった。遺跡は丘陵上に広がるものと想定された。峯添遺跡では、Ⅰ区南半部の道路構造物範囲について調査を行い終了した。調査の結果、遺構は確認されなかった。南のⅡ区においては丘陵の中腹から裾の3000㎡について表土を削ぎ遺構の確認を行った。この結果、丘陵の中腹に墓標を伴う近世墓地、古墳時代住居跡、土坑などを検出した。

また丘陵上で石器数点を採集している。

平成元年度調査

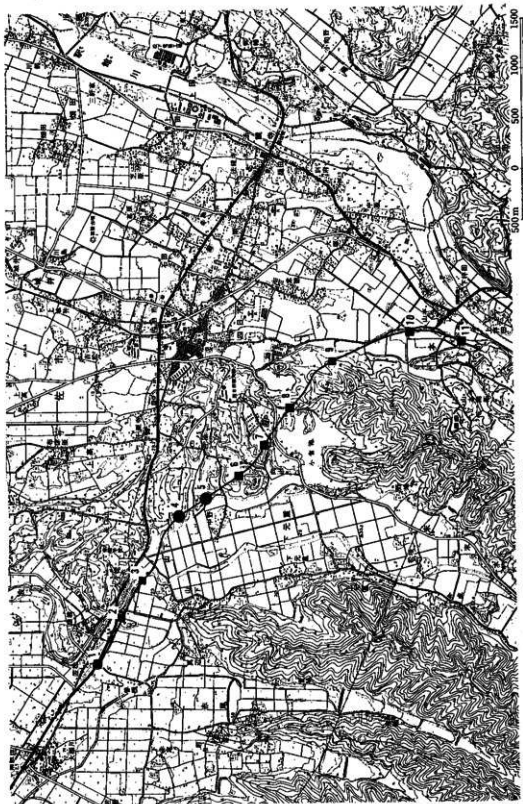
峯添遺跡Ⅱ区の北半部の確認調査を実施した。この結果、土坑、不整形の落込みなどを確認した。

平成2年度調査

桐ヶ迫遺跡については、調査範囲全面の表土剥ぎを行い遺構の確認を実施した。丘陵頂部付近に円墳1基、土坑、溝状の落込み、南向き斜面の中腹には近世墓地、南斜面の裾部に溝と須恵器窯跡の灰原の一部を確認し、調査を実施した。峯添遺跡では、桐ヶ迫遺跡と谷を挟み南西に位置するⅠ区の丘陵について調査を実施した。検出した遺構は、堅穴遺構、土坑、炭窯などであった。

4 調査の方針と方法

道路建設予定地内の調査については遺構の確認調査を実施し、その結果を踏まえて本調査を行うという手順で進めた。確認調査はトレンチ・グリッド法を併用して行う方法と対象地全域の表土を除去して行う2つのやり方を適宜用いた。



- 1 笠松道路
- 2 横山道路
- 3 尾畑道路
- 4 新ヶ谷道路
- 5 兼添道路
- 6 正布迫道路
- 7 柳沢道路
- 8 松ヶ平道路
- 9 向山道路
- 10 下林道路
- 11 感空寺道路 (宇佐別府道路)

● 本年調査点

(本図は国土地理院「宇佐」(2万5千分の1)地形図を使用した)

第1図 宇佐道路路線内道路位置図

第 2 章 調査遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の所在する宇佐市は、東を豊後高田市・山香町、西を中津市・三光村、南を院内町・安心院町に囲まれ、北は周防灘に面している。海岸部より広大な沖積平野が広がり、丘陵は耶馬溪溶岩流で形成された山系の一部をなす。この山系から派生する多くの河川が地形をつくりながら海へ注ぐ。主要な河川は市東部の駅館川でこれに次ぐものとして西部の伊呂波川がある。調査を実施した桐ヶ追遺跡、峯添遺跡は伊呂波川と東面する四日市台地に所在する。

この四日市台地は西に向かって樹枝状の丘陵がみられ、遺跡は丘陵の斜面、上部に分布している。

旧石器時代では、本報告の桐ヶ追遺跡や峯添遺跡など丘陵上に旧石器の散布、同時期の遺構が僅少なながら認められる。また同一丘陵上に位置する正布ヶ追遺跡において旧石器の散布が確認されている。周辺では、南部の小倉池や小菊池周辺に石器の散布がみられ、四日市台地上に旧石器時代の遺跡が広がっているものと考えられる。

縄文時代の遺跡は、今回の調査では確認されていないが、四日市台地からみて伊呂波川の対岸となる河岸段丘上の尾畑遺跡に後期の竪穴住居跡、後期～晩期の包含層の形成がみられ調査によって当該期の多量な土器、石器類、土偶などが検出されている。近辺では、西部の五十石川右岸に後期初頭の良好な資料が検出された西和田貝塚がある。このように、四日市台地周辺の遺跡では河岸段丘上の立地が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、四日市台地の北端部に台ノ原遺跡がある。この遺跡は6次にわたる調査で前期～後期の遺構が検出された。前期では袋状土坑、中期では初頭から中葉におよぶ集落が明らかにされた。さらに中期前半～後半の竪棺、箱式石棺など墓地の形成も確認されている。また駅館川の段丘上、微高地には東上田遺跡、野口遺跡、川部遺跡、別府遺跡など前期末から後期後半の連続的な遺跡の存在が知られている。

古墳時代の遺跡としては、峯添遺跡の集落、また平野を望む丘陵先端付近には古墳が分布しており、桐ヶ追遺跡、向山古墳群、久々施古墳群などが所在する。四日市台地とその周辺には多く円墳が分布しており、川部・高森地区の赤塚古墳、葛原古墳、鶴見古墳など首長墳の造営された地域とは異なる墓形成の展開が窺われる。生産遺跡では、桐ヶ追遺跡に須恵器窯跡の一部とその灰原を確認しており、散在的な窯業の様相を知ることができる。

古代の遺跡としては、前出の尾畑遺跡で奈良時代の建物群が検出され、多くの土器と共に「和同開寶」が出土しており、官衙的な性格をもつ遺跡として注目された。

中世には既報告の笠松遺跡の火葬墓群が近隣に所在する。

近世の遺跡については、墓地のあり方が明らかにされつつある。調査例は今回の報告に含んでいる。



第2図 宇佐道路間辺通跡分布図

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 草吹遺跡 | 99. 東吉ノ上石遺跡 |
| 2. 鹿嶋遺跡 | 100. 野野遺跡 |
| 3. 鹿嶋遺跡 | 101. 法興寺遺跡 |
| 4. 柳ノ谷遺跡 | 102. 法興寺遺跡 |
| 5. 鹿嶋遺跡 | 103. 上平石遺跡 |
| 6. 足石遺跡 | 104. 丹波石遺跡 |
| 7. 鹿嶋遺跡 | 105. 大塚内遺跡 |
| 8. 柳ノ谷遺跡 | 106. 鹿嶋山古墳 |
| 9. 鹿嶋遺跡 | 107. 山ノ下石遺跡 |
| 10. 鹿嶋遺跡 | 108. 山ノ下石遺跡 |
| 11. 鹿嶋遺跡 | 109. 鹿嶋山古墳 |
| 12. 上平石遺跡 | 110. 五神石遺跡 |
| 13. 鹿嶋遺跡 | 111. 小倉遺跡 |
| 14. 鹿嶋遺跡 | 112. 手ノ上石遺跡 |
| 15. 鹿嶋遺跡 | 113. 鹿嶋山古墳 |
| 16. 鹿嶋遺跡 | 114. 鹿嶋山古墳 |
| 17. 鹿嶋遺跡 | 115. 鹿嶋山古墳 |
| 18. 鹿嶋遺跡 | 116. 鹿嶋山古墳 |
| 19. 鹿嶋遺跡 | 117. 鹿嶋山古墳 |
| 20. 鹿嶋遺跡 | 118. 鹿嶋山古墳 |
| 21. 鹿嶋遺跡 | 119. 鹿嶋山古墳 |
| 22. 鹿嶋遺跡 | 120. 鹿嶋山古墳 |
| 23. 鹿嶋遺跡 | 121. 鹿嶋山古墳 |
| 24. 鹿嶋遺跡 | 122. 鹿嶋山古墳 |
| 25. 鹿嶋遺跡 | 123. 鹿嶋山古墳 |
| 26. 鹿嶋遺跡 | 124. 鹿嶋山古墳 |
| 27. 鹿嶋遺跡 | 125. 鹿嶋山古墳 |
| 28. 鹿嶋遺跡 | 126. 鹿嶋山古墳 |
| 29. 鹿嶋遺跡 | 127. 鹿嶋山古墳 |
| 30. 鹿嶋遺跡 | 128. 鹿嶋山古墳 |
| 31. 鹿嶋遺跡 | 129. 鹿嶋山古墳 |
| 32. 鹿嶋遺跡 | 130. 鹿嶋山古墳 |
| 33. 鹿嶋遺跡 | 131. 鹿嶋山古墳 |
| 34. 鹿嶋遺跡 | 132. 鹿嶋山古墳 |
| 35. 鹿嶋遺跡 | 133. 鹿嶋山古墳 |
| 36. 鹿嶋遺跡 | 134. 鹿嶋山古墳 |
| 37. 鹿嶋遺跡 | 135. 鹿嶋山古墳 |
| 38. 鹿嶋遺跡 | 136. 鹿嶋山古墳 |
| 39. 鹿嶋遺跡 | 137. 鹿嶋山古墳 |
| 40. 鹿嶋遺跡 | 138. 鹿嶋山古墳 |
| 41. 鹿嶋遺跡 | 139. 鹿嶋山古墳 |
| 42. 鹿嶋遺跡 | 140. 鹿嶋山古墳 |
| 43. 鹿嶋遺跡 | 141. 鹿嶋山古墳 |
| 44. 鹿嶋遺跡 | 142. 鹿嶋山古墳 |
| 45. 鹿嶋遺跡 | 143. 鹿嶋山古墳 |
| 46. 鹿嶋遺跡 | 144. 鹿嶋山古墳 |
| 47. 鹿嶋遺跡 | 145. 鹿嶋山古墳 |
| 48. 鹿嶋遺跡 | 146. 鹿嶋山古墳 |
| 49. 鹿嶋遺跡 | 147. 鹿嶋山古墳 |
| 50. 鹿嶋遺跡 | 148. 鹿嶋山古墳 |
| 51. 鹿嶋遺跡 | 149. 鹿嶋山古墳 |
| 52. 鹿嶋遺跡 | 150. 鹿嶋山古墳 |
| 53. 鹿嶋遺跡 | 151. 鹿嶋山古墳 |
| 54. 鹿嶋遺跡 | 152. 鹿嶋山古墳 |
| 55. 鹿嶋遺跡 | 153. 鹿嶋山古墳 |
| 56. 鹿嶋遺跡 | 154. 鹿嶋山古墳 |
| 57. 鹿嶋遺跡 | 155. 鹿嶋山古墳 |
| 58. 鹿嶋遺跡 | 156. 鹿嶋山古墳 |
| 59. 鹿嶋遺跡 | 157. 鹿嶋山古墳 |
| 60. 鹿嶋遺跡 | 158. 鹿嶋山古墳 |
| 61. 鹿嶋遺跡 | 159. 鹿嶋山古墳 |
| 62. 鹿嶋遺跡 | 160. 鹿嶋山古墳 |
| 63. 鹿嶋遺跡 | 161. 鹿嶋山古墳 |
| 64. 鹿嶋遺跡 | 162. 鹿嶋山古墳 |
| 65. 鹿嶋遺跡 | 163. 鹿嶋山古墳 |
| 66. 鹿嶋遺跡 | 164. 鹿嶋山古墳 |
| 67. 鹿嶋遺跡 | 165. 鹿嶋山古墳 |
| 68. 鹿嶋遺跡 | 166. 鹿嶋山古墳 |

第 3 章 発掘調査の成果

1 桐ヶ迫遺跡の遺構と遺物

調査は、伊呂波川右岸に位置する標高約40mの丘陵とその南側の低地を合わせた7563㎡の範囲を対象とした。遺跡の立地する丘陵は四日市台地の西辺部にあたり、谷で開析された樹枝状の丘陵の一つである。

調査の結果、古墳1基、須恵器窯の灰原、近世墓地、このほかに溝や土坑を検出した。さらに丘陵上部付近において細石刃核などを採集していたので旧石器確認のためトレンチおよびグリッドを設定し、この調査を実施した。

古墳については調査範囲外の至近地にも数基を確認している。このうち1基は「宇佐市内埋蔵文化財分布図」（昭和56年3月、宇佐市役所）に記載されている桐ヶ迫古墳である。このため、今回検出した古墳を2号墳とした。須恵器窯の灰原はこの丘陵の南側斜面下辺で確認したものである。灰原の状況から複数の窯跡の存在を想定できるが、灰原の大半と窯跡は調査範囲外となる南向き斜面裾部付近に位置する。

近世墓地は丘陵上部に近い南斜面に位置していた。墓地の範囲は斜面が掘削、整形され平坦となっていた。下部施設として3基の円形土坑を確認した。このうちの1基から「寛永通宝」6枚、ほかの1基からは錫杖と金具が出土している。

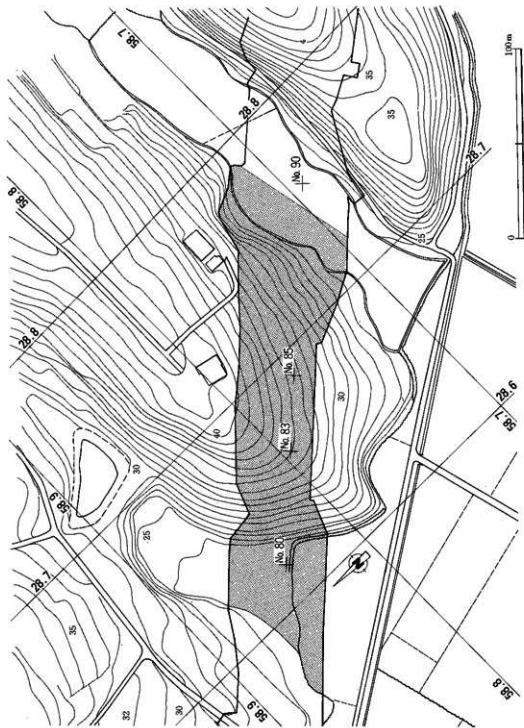
このほかの遺構としては溝、土坑などがある。溝は南向き斜面の裾部付近に位置し、ほぼ等高線に平行して伸びている。この溝は覆土中から須恵器が出土しており、至近地にある窯の付属施設の可能性がある。

桐ヶ迫遺跡2号墳

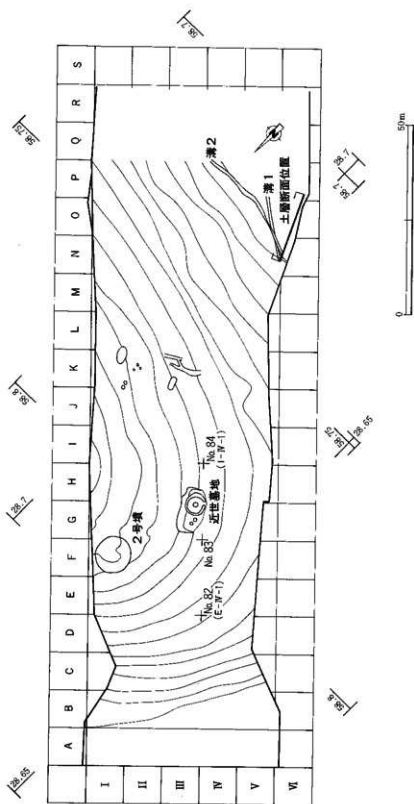
古墳は丘陵の上部平坦面の縁辺に位置する円墳である。主体部は西方向に開口する横穴式石室である。

墳丘は周溝外径9.3m～10m、周溝内径7.3m～7.8mの規模で南北方向にやや長い円形であった。高さは現状で1mほどであった。墳丘は後世掘削され、また南西方向に多く流出しており旧状がかなり損なわれていた。特に石室右側壁から墳丘西部にかけて掘り込まれた落ち込みは、墳形を大きく改変させている。

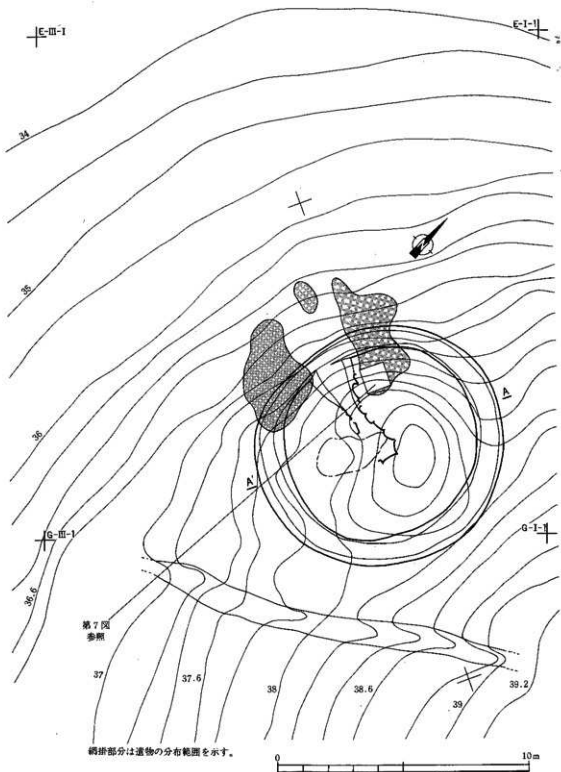
墳丘の盛土作業は墳丘中央付近の基底面に一部旧土土が残るものの、周溝外側までの地山整形後に行われている。盛土は石室構築に応じて版築がなされ、石室構築後に最終段階の作業がみられる。



第3図 網ヶ池遺跡・周辺地形図



第4圖 桐ヶ迫遺跡遺構分布図



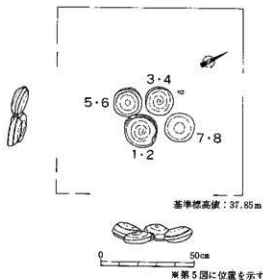
第5図 2号墳・周辺地形図

周溝は0.5m～1.3m、深さ0.5m程度で全周するが、斜面下側は浅くなっている。

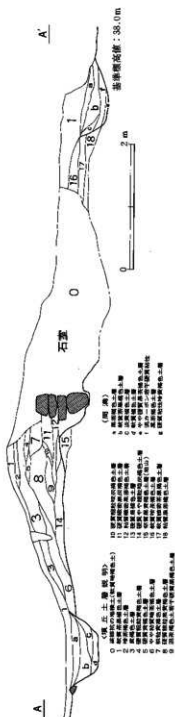
内部主体は両袖単室の横穴式石室である。主軸方位は北101度東を指向する。これは等高線と直交する方向となっており、石室が斜面下の平野部に向かい開口することを示している。

石室の残存状態は右側壁と床面の大半を失っていたが、奥壁、左側壁では比較的良好であった。奥壁には0.6m×0.9mの石材が用いられ、これを挟む形で左右の腰石が据えられていた。左側壁は4石の腰石の上に板石状の石材が3～4段ほど残存していた。

玄室は主軸方向の長さ1.7m、幅は奥壁で0.85m、中央で推定1m、袖部0.45mの規模をもち、やや胴張型の形態を呈している。用いられている石材は腰石が0.55m×0.35m程度と小さく、石室の平面形も小規模である。床面は平坦で、敷石に用いられていた長径0.1m程度の河原石が若干残っていた。石室の掘形は地山整形面から掘り込まれている。掘形は偏楕円形を呈し、2.3m×2.1mの規模である。掘形の埋土は黄褐色土ブロック混りの黒褐色土であった。閉塞石は楕石付近から漢道にかけて0.1m～



第7図 2号墳墳丘内須恵器出土状態



第6図 2号墳墳丘土層断面図

0.4m大の石を積み上げたものである。

羨道は左壁で1.5mと短く、側壁の石積は袖石に接続して1～2段ほど残っていた。

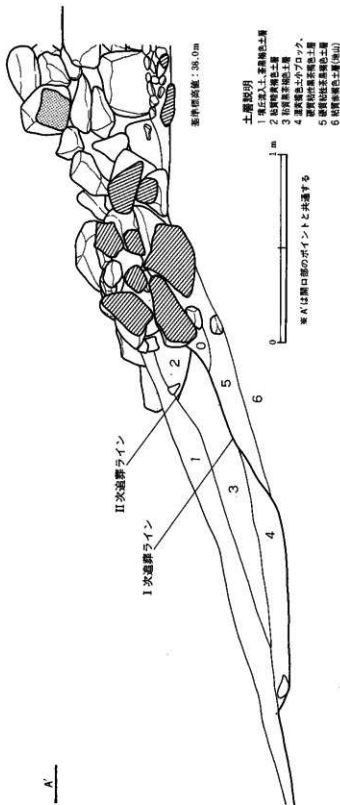
墓道は羨道から延長して1.7mほどの長さで付設され、周溝まで伸びる。幅は羨道側で0.8m、先端で1.9mと外に向かい開いている。

追葬については、墓道の堆積土の観察からⅡ次にわたって行われていることを確認した。

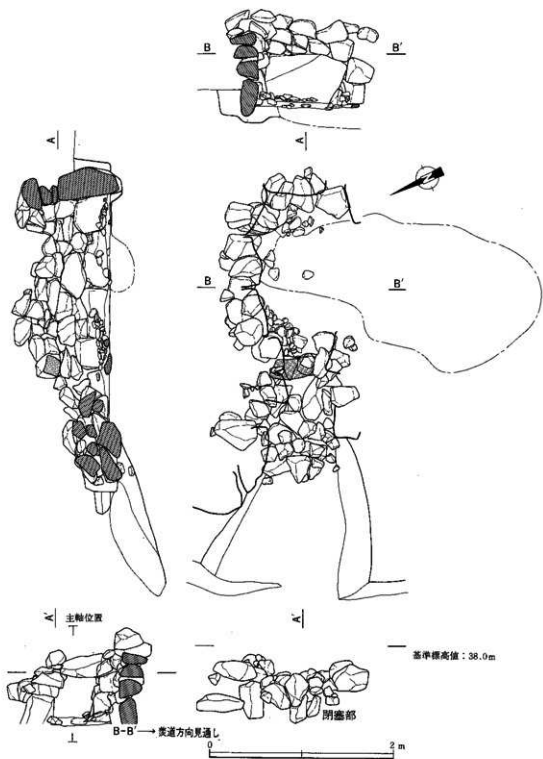
出土遺物は、石室内で玉類、鉄鏃が検出されたが原位置を保つものではない。墓道の堆積土中の玉類は追葬時にかき出されたものと思われる。

墓道右側の墳丘内からは石室構築時に置かれた須恵器杯蓋身の4セット(第5図、第10図3～8)が正位置で検出された。墓道を挟む墳丘の西裾から周溝、周溝外にかけて多量の須恵器破片、土師器破片が散布していた。これらの遺物は墳丘上からの流入土に混在する状態で出土した。

墳丘上に構築された落ち込みは、覆土中から中世の土器が検出されており、この時期に古墳再利用のため掘削された可能性がある。



第8図 2号填築部土層断面図



第9図 2号填石室実測図

2号墳出土遺物(第10図～第14図、表1) 出土土器は土師器甕、鉢、小壺などがみられるものの量的に須恵器が多い。須恵器の器種は坏、高坏、甕、壺、提瓶、甌など多様であった。特殊なものとして甌および長頸壺のミニチュアと台付有蓋壺がある。また中世の土器が若干出土している。このうち須恵器・土師器は周溝内、墳丘およびその周辺から出土したもので、中世土器は墳丘を掘り込んだ土坑から出土したものである。玉類、鉄鍬、銀製環については石室埋土中、周溝から出土したものである。

墳丘出土土器

須恵器(第10図～第12図、第13図5・6)

蓋坏(第10図、第11図12)

第10図1～10は蓋と身が組み合せて出土したが焼成時のセットを示すものではない。

蓋は形態、技法から、A、B、Cの3タイプに区分できる。Aタイプは、口縁部内面に低い稜あるいは沈線が巡る(第10図1・3・5・7・17・19)。天井部と口縁部の境は明瞭で、低い稜か沈線が残り、口縁部は直線的に垂下するもの(第10図1・19)とやや丸みを帯びて垂下するもの(第10図3・5・7・17)がある。天井部は概ね平坦に仕上げられている。大きさは口径13.8cm～15.2cm、器高3.2cm～4.5cmと大形品のすべてがこのグループに入る。調整は、天井部に回転ヘラ削りが施されている。

Bタイプは口縁部内面に稜や沈線がなく丸く仕上げられており、口縁端部で内湾(第10図11)、やや丸みを帯びて垂下するもの(第10図13・15・20、第11図1～3)、やや外反する(第10図18)3つの形態がある。天井部は、①ほぼ平坦に仕上げられるもの(第10図9・11)、②緩い山形状をなすもの(第10図13・15・20、第11図1～3)がある。大きさは口径12.3cm～14.4cm、器高3.2cm～4.2cmと幅がある。ただ天井部①は14cm台と大きく、②タイプは小形品となる傾向がある。調整はAタイプと同様に天井部に回転ヘラ削りが施される。

Cタイプ(第11図9)は、天井部が頂部付近が平坦で、口縁部は丸く端部に向かって外反気味で細くなる。大きさは口径12.3cm、器高3.6cmと最も小形である。調整は、天井部が回転ヘラ切り後、若干ナデが施されている。

身は形態、技法から、A、B、Cの3タイプに区分できる。

Aタイプは口縁部が長く伸びる形態をもつ(第10図2・4・6・8、第11図7)。底部は平坦気味に整形されている。大きさは、第11図7を除けば11cm後半台～12.9cmと幅をもつが、器高4.5cm以上で大形品はすべてこの範囲内に包括される。調整は、底部に回転ヘラ削りが施される。

Bタイプは口縁部が、①上へ向かい屈曲するもの(第10図10、第11図4)、②直線的に伸びるもの(第10図12・14、第11図5・6・8)がある。大きさは、11.3cm～13.2cm、器高3.4cm～4.4cmである。調整は、底部に回転ヘラ削りが施される。

Cタイプは口縁部形態に、①断面形が三角形に近いもの（第11図10）と②比較的短く、内傾に立ち上がるもの（第11図11・12）の2つがある。大きさは口径10.5cm、10.8cm、器高3cm台に取まり最も小型の一群である。底部の調整は回転ヘラ切りでナアを施すか、未調整となっている。

蓋坏は、胎土に斜長石や角閃石粒を含む例があり、器面に砂粒が焼成時に破裂した痕跡を残すものがある。焼成は良好で、暗灰褐色を基調とする色調を呈する。

蓋坏のセット関係は、蓋Aが身A・B、蓋Bが身B、蓋Cが身Cとそれぞれ対応するものである。また型式変化はA→B→Cと連続的にみることができる。

壙（第11図13）

壙はこの1点が出土している。体部は球状をなし口縁部は直立気味に立ち上がる。体部下半には回転ヘラ削りが施され、稜がつく。口径11.2cmと推定される。

高坏（第11図14・15・16）

高坏はすべて無蓋高坏である。14は浅く小型の坏部をもち、体部下端に稜がつく。脚部は短い柱部から脚端部に向かって広がる。脚端部は細い。坏部下半に回転ヘラ削りがみられ、柱部に二条の沈線が巡る。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。大きさは口径11.6cm、器高11.2cmである。15は浅い坏部をもち、脚部は長い柱部から脚端部に向かって緩く広がる。脚端部は外へ短く屈曲する。坏部下半に回転ヘラ削りがみられ、柱部にカキ目が施されている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で暗灰褐色を呈する。大きさは口径11.6cm、器高14.5cmである。16は坏部が浅く、口縁部は体部下半からやや外反して立ち上がる。脚部は坏底部から八字状に大きく広がる。脚端部は丸みをもち外へ短く屈曲する。坏部下半に回転ヘラ削りがみられ、柱部にカキ目が施されている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で暗灰褐色を呈する。大きさは口径15cm、器高10.9cmである。

甗（第12図1）

頸部～口縁部の破片である。頸部は口縁部に向かい広がり、口縁部は頸部との境から外へ開く。口縁端部は細く仕上げられている。頸部外面に櫛播波状文が施されている。大きさは口径12cmである。胎土に白色砂粒を含み、焼成は通有で暗灰色を呈する。

提瓶（第12図2）

頸部～口縁部の破片である。頸部は口縁部に向かい直立する。外面に二条の沈線が巡る。大きさは口径7.2cmである。胎土に斜長石粒を含み、焼成は不良で淡灰褐色を呈する。

有蓋台付壺（第12図3）

頸部～口縁部が残るのみで、体部以下を欠く。口縁部は器壁が厚く丸く仕上げられ、直立気味に立ち上がる。受部は短く水平に伸びる。頸部は器壁が厚く、体部に向かいやや細くなる。胎土に細砂を含み、焼成は極めて良好で堅緻となっており、暗灰褐色を呈する。

壺（第12図4・5）

4は頸部-口縁部の破片である。頸部は直立気味に立上がり、口縁部は細く短く外へ屈曲する。5は体部の破片で球体をなす。体部下半に回転ヘラ削りがみられる。4・5共に胎土に斜長石粒を含み、焼成は不良で淡灰褐色を呈する。

甕 (第12図6~14)

6は胴部が大きく張り、最大径を上位にもつ。頸部は短く外反し、口縁部は端部で肥厚する。胴部外面に木目直交叩き、内面に同心円の当具痕が残る。大きさは頸部は短く外反し、口径22.5cm、器高48.4cmである。7は口縁部-胴部上半部が残る。胴部は緩く張り、頸部は短く外反する。口縁部は丸く肥厚し、端部で内湾する。胴部外面に平行叩き、内面に同心円の当具痕が残る。口径は14.9cmである。8~14は口縁部-頸部破片である。口縁端部は矩形に肥厚する。8、12~14は胴部外面に櫛指波状文が施されている。甕の焼成は通有では灰褐色を呈する。

小形甕 (第13図5)

口径6.9cm、器高6.8cmの小形の甕である。偏平な体部をもち、頸基部は細く口縁部に向かって広がる。口縁部は頸部からやや内湾気味に立ち上がる。底部は周縁を回転ヘラ削りで調整され、平坦となっている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。

小形長頸壺 (第13図6)

口径4.1cm、器高6.9cmの小形の長頸壺である。偏平な体部をもち、頸部は口縁部に向かって緩く開き気味に立ち上がる。頸部と体部上位に沈線をもつ。底部はヘラ削りで調整され、平坦となっている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。

土師器 (第13図1~4、7)

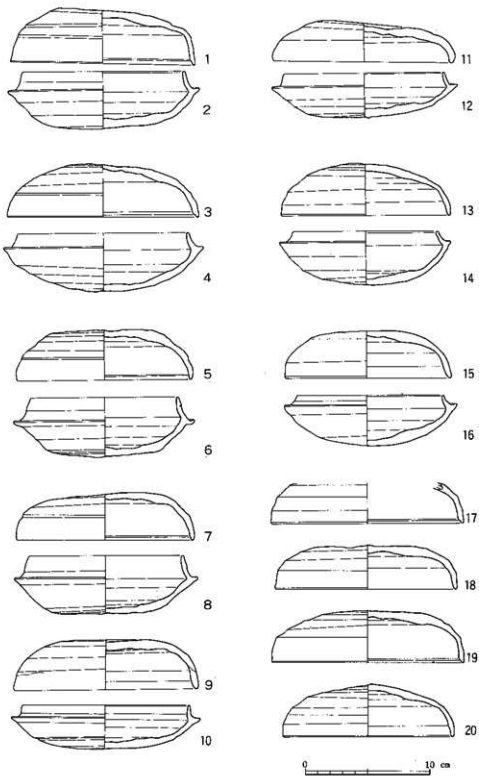
1は高坏の坏部で脚部を欠く。体部は丸く、口縁部はやや肥厚し外反する。体部外面に斜方向のハケ目、内面にヘラ削りが施されている。口径は29cmである。2は壺で短く外反する口縁部をもつ。体部外面に斜方向のハケ目、内面にヘラ削りが施されている。口径は16.1cmである。3・4は甕で共に外反する口縁部をもつ。胴部内面にヘラ削りが施されている。胎土に斜長石粒・角閃石粒を含み、焼成は概して不良で、色調は橙色を呈する。

7は口径5.6cm、器高5.8cmの小壺である。体部は偏平な球状に張り、口頸部は短く外反する。胎土に斜長石粒を含み、焼成は不良で黄褐色を呈する。

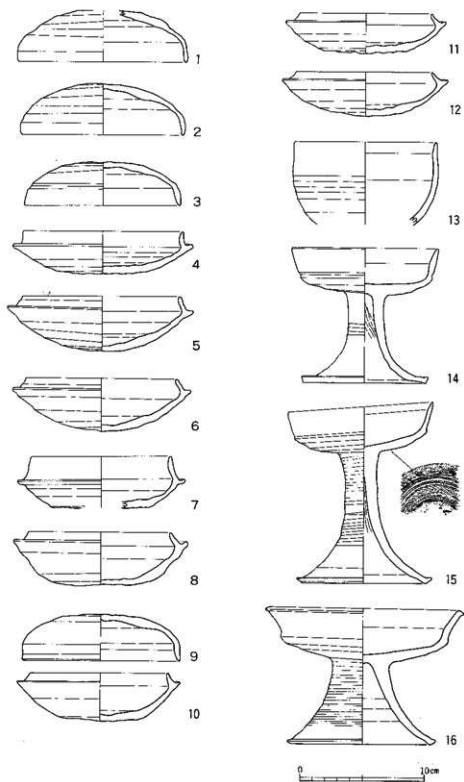
古墳周辺表土器 (第14図1~6)

これらの遺物は古墳以外に同時期の遺構が検出されていないので、古墳に帰属するものと考えられる。

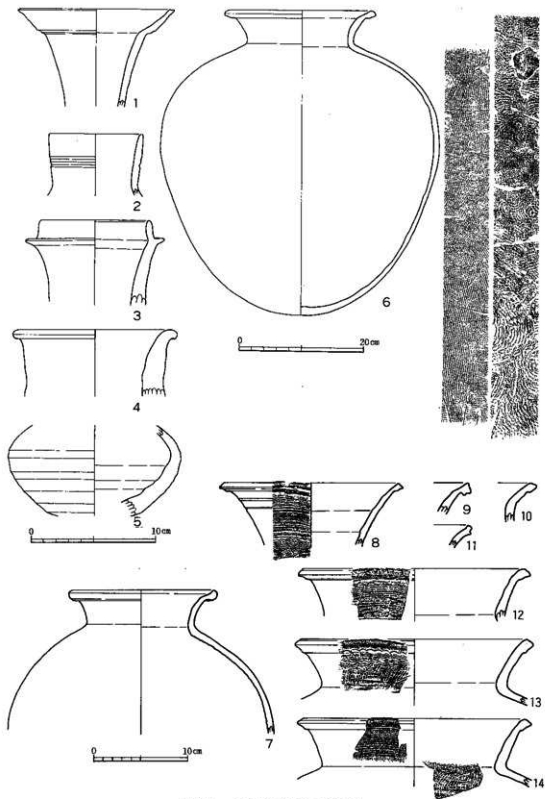
1・2は須恵器蓋坏である。1は山形をなす蓋で、2は器高の低い身である。天井部、底部には回転ヘラ削りが施されている。3は須恵器壺の口縁部破片である。4・5は須恵器壺の口縁-頸部破片で5の外面に櫛指波状文がみられる。6は土師器の口縁部付近の破片である。



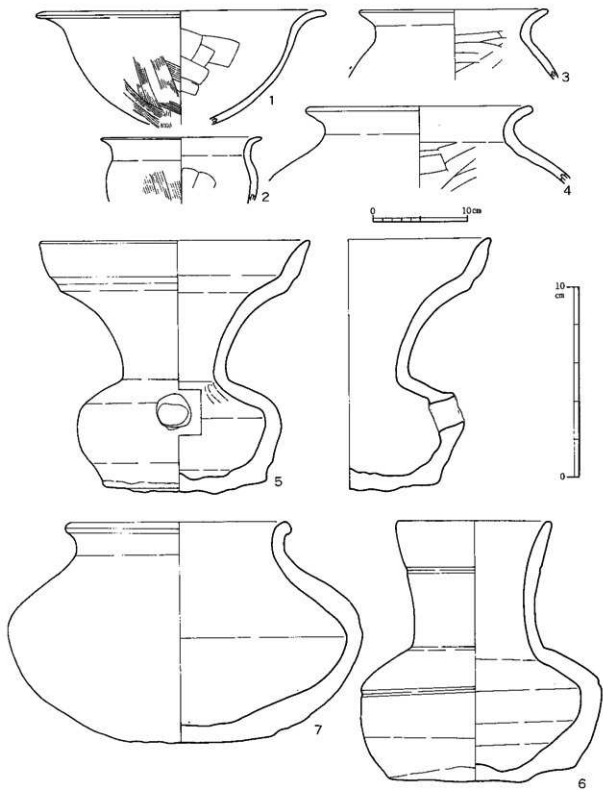
第10图 2号出土文物实测图(1)



第11图 2号墳出土遺物実測図(2)



第12图 2号墳出土遺物実測図(3)



第13图 2号墳出土遺物実測図(4)

墳丘落ち込み内出土土器 (第14図7-11)

7-9は土師質坏で体部下端は丸みを帯び、やや内湾気味に立ち上がる。8・9は底部に板状圧痕を残す。大きさは口径9.8cm～10cm、器高2.5cm前後である。

10・11は瓦器で体部下半に指押さえがみられる。10は底部に断面三角形の低い高台が付く。口径14.7cm、14.8cm、器高5.7cmである。

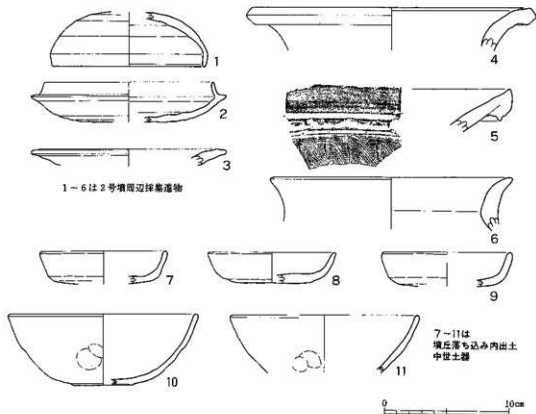
石室および周溝出土玉類、金属製品 (第15図・第16図)

玉類 (第15図1-43) はすべて石室内から出土したガラス製の小玉である。色調によって分類すると、藍色が1-14、淡藍色は15・16、群青色は17、青緑色は18-29、淡青色は30-40、黄色は41-43のようになる。

形状は1が楕円形を呈するものの、ほかはほぼ円形である。大きさは1が最も大きく長径1.1cm、短径0.8cm、厚さ0.6cmである。ほかの例は径0.35cm～0.55cm、厚さ0.2cm～0.4cmである。厚さが径以上になるものは16・26・36と少なく、ほとんどが扁平な形状となっている。

銀製環 (第15図44)

石室埋土内から出土した耳環で完形品である。大きさは外径2.3cm、断面径0.25cmで、断面形



第14図 2号墳出土土遺物実測図(5)

は円形を呈する。

鉄鍔（第16図1・2）

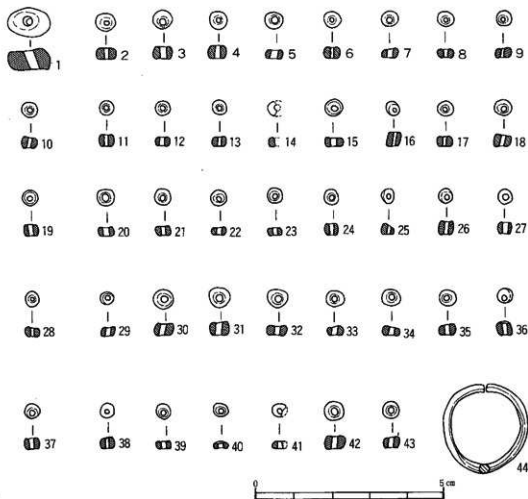
1の頭部は南側周溝内、1の基部先端と2は石室の推積土中から出土した。1は方頭斧箭式で、大きさは全長19cmほどと推定され、頭部長8.6cm、刃部幅3.6cmである。刃部はやや弧状に湾曲する。2は基部の大半を欠く。頭部は扇状に広がる。

刀子（第16図3）

墳丘落ち込み内から出土したものである。身部と基部の大半を欠き、両側付近の形状のみ確認できる。

遺物の時期について

石室内から出土した土器類はないが、墳丘周辺の出土遺物から古墳の年代が考えられる。須恵器からみると、TK 43の古相を示す坏Aタイプ、同一型式内でこれに続く坏Bタイプ、TK 209



第15図 2号墳出土遺物実測図(6)

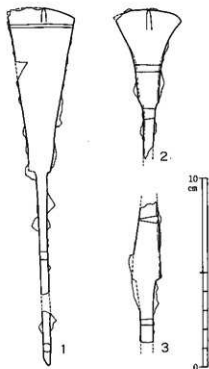
の坏Cタイプがある。従って、この古墳は初葬時から追葬までの時期を6世紀後半～末頃と考えられる。墳丘落ち込み内出土の土師質土器・瓦器は14世紀前半に比定される。

灰原（第17図）

調査区南辺の斜面裾部で行ったトレンチ調査において確認した。当該地域は果樹園造成にともなう地形が著しく改変されており、確認できた灰原は土層断面に僅かに残っていたものである。調査区の位置する丘陵は、南側を東から派生する谷に開析されている。調査対象地区外となるが、この南向き斜面の谷入口付近に窯跡が確認されており、調査区で検出した灰原はその東側限界を示すものである。調査にともなう須恵器などが出土した。

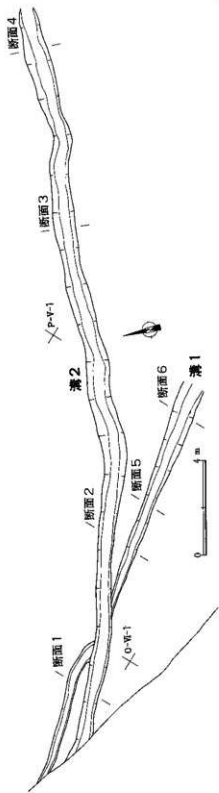
溝（第18図）

溝1・2は等高線に沿って西から東方向に伸びる。東側の先端は造園によって掘削され消失している。西側は調査区の外へ伸びるため不明であるが窯跡の位置する方向へ向かう。溝の規模は、溝1が確認長17m、幅0.24m～1m、深さ0.25m～0.75m、溝2は確認長31m、幅0.6m～1.1m、深さ0.25m～0.7mである。堆積土中から須恵器が出土しており、窯跡に関連する遺構と推定される。



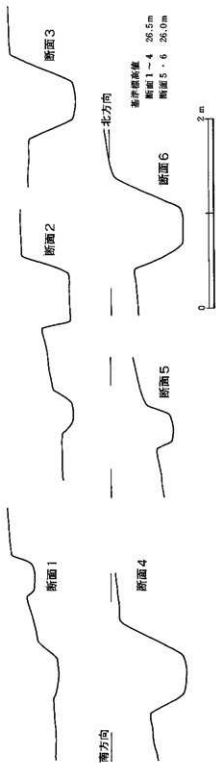
第16図 2号墳出土遺物実測図(7)

0-70-1

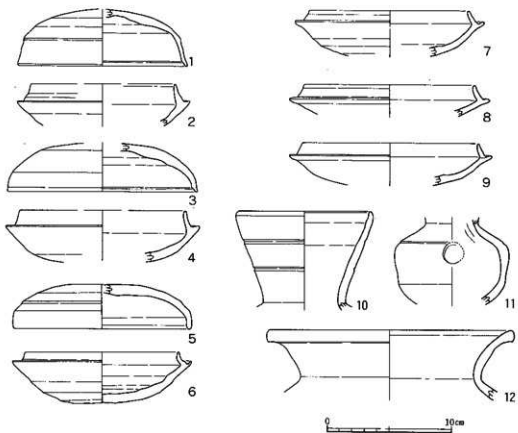


南方向

北方向



第18回 溝1、2 実測図



第19图 灰原出土须惠器实测图

表1 桐ヶ迫遺跡2号墳出土遺物観察表

器種は表記以外はすべて須恵器 大きさ
口径
単位: cm 器高

図版 番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
10-1	坏蓋	14.7 4.5	天井部右回転ヘラ削	細砂やや多量、焼成は通有、器内部分は還元が進んでいない。灰褐色。	完形 1-2とセット
10-2	坏身	12.9 4.6	底部右回転ヘラ削	細砂やや多量、焼成は通有、器内部分は還元が進んでいない。灰褐色。	完形 1-1とセット
10-3	坏蓋	15.2 4.2	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含み、焼成は良好、灰褐色を基調とする。	完形 1-4とセット
10-4	坏身	13.5 4.5	底部右回転ヘラ削	斜長石粒・白色砂粒を含み焼成は通有灰褐色を基調とする。	完形 1-3とセット
10-5	坏蓋	13.8 4.0	天井部右回転ヘラ削	斜長石微量、白色砂粒若干、焼成は通有、青灰色～暗灰褐色。	完形 1-6とセット
10-6	坏身	11.7 4.8	底部右回転ヘラ削後、ナデ	斜長石粒・白色砂粒やや多量、焼成は通有暗灰色。内外面に黒色破裂粒。	完形 1-5とセット
10-7	坏蓋	14.0 3.8	器面の荒れのため調整不明	斜長石微量、白色砂粒若干含む、焼成は通有、青灰色～暗灰褐色。	完形 1-8とセット
10-8	坏身	12.3 4.7	底部右回転ヘラ削	角閃石粒微量、斜長石粒・白色砂粒若干。焼成は通有、暗灰色。内外面に黒色破裂粒。	完形 1-7とセット
10-9	坏蓋	14.4 4.0	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒やや多量、焼成はやや軟弱、灰褐色。	完形 1-10とセットで出土したが焼成時のセットでない。
10-10	坏身	13.2 3.6	底部右回転ヘラ削	細砂若干。焼成は通有、暗灰色。内外面に黒色破裂粒顕著。	完形
10-11	坏蓋	14.4 3.2	天井部右回転ヘラ削	斜長石粒・白色砂粒を含み、焼成通有灰褐色を基調とする。	完形
10-12	坏身	12.7 3.5	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有、灰褐色を基調とする。	完形
10-13	坏蓋	13.3 4.2	天井部右回転ヘラ削	雲母粒・白色砂粒を含む、焼成良好、赤灰褐色を基調とする。内面に黒色破裂粒。	完形
10-14	坏身	11.5 4.3	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は良好、黒灰褐色を基調とする。内外面に黒色破裂粒。	完形
10-15	坏蓋	13.1 4.2	天井部右回転ヘラ削	細砂若干、焼成は堅緻で良好、器面は暗赤褐色、断面は灰褐色。	完形
10-16	坏身	11.5 4.0	底部右回転ヘラ削	細砂若干、破裂砂粒痕、焼成は堅緻で良好。器面は暗赤褐色。	完形
10-17	坏蓋	15.2 —	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有、色調は灰色を基調とする。内面に黒色破裂粒。	口一頸 1/4
10-18	坏蓋	14.3 3.5	天井部右回転ヘラ削	斜長石粒・白色砂粒微量、焼成は通有灰褐色、内外面に黒色破裂粒。	ほぼ完形
10-19	坏蓋	15.2 4.1	天井部右回転ヘラ削	雲母粒微量、白色砂粒若干、焼成は通有。灰色。	口縁部 1/3欠

図版 番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
10-20	坏壺	13.5 4.1	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒若干、焼成は通有。器面は暗赤褐色、内外面に黒色破裂粒。	口縁部 1/4欠
11-1	坏壺	13.3 (4.1)	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色。	完形
11-2	坏壺	12.8 4.1	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色内外面に黒色破裂粒。	完形
11-3	坏壺	12.3 3.4	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。暗灰色。	口縁部 1/4欠
11-4	坏身	12.7 3.4	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を少量、焼成は通有。暗灰色。	口～底部破片
11-5	坏身	12.6 4.4	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。灰色。	口縁部 2/3欠
11-6	坏身	12.0 4.2	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色。	完形
11-7	坏身	(11.1) —	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。暗灰褐色。	口～底部破片
11-8	坏身	11.3 4.3	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色内外面に黒色破裂粒。	ほぼ完形
11-9	坏壺	12.3 3.7	天井部右回転ヘラ切り後、ナデ	細砂若干、破裂砂粒痕、焼成は通有。暗灰褐色。	完形
11-10	坏身	10.8 3.8	底部右回転ヘラ切り後ナデ	細砂やや多量、焼成は通有。暗灰色。	完形
11-11	坏身	10.5 3.2	底部回転ヘラ切り未調整	白色砂粒を含む焼成は通有。暗灰色。	1/3 個体
11-12	坏身	10.8 3.5	底部回転ヘラ切り未調整	白色砂粒を含む焼成は通有。暗灰色。	口縁部 1/4欠
11-13	埴	(11.2) —		斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成は通有。灰色。	体部破片
11-14	無蓋高坏	11.6 11.2	坏底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む焼成は通有。灰褐色。	坏部 焼歪み 1/2欠
11-15	無蓋高坏	11.6 14.5	坏底部右回転ヘラ削・カキ目	白色砂粒を含む焼成は通有。色調は暗灰褐色。	完形
11-16	無蓋高坏	15.0 10.9	坏底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む焼成は通有。色調は暗灰褐色。	完形 焼歪み
12-1	罎	12.0 —	外面髷掻き波状文	白色砂粒を含む焼成は通有。暗灰色。	口～頸部 1/2
12-2	提瓶	7.2		斜長石粒を含む、焼成は不良。色調は淡灰褐色。	口～頸部 1/3
12-3	有蓋台付壺	8.6 —		細砂若干、焼成は堅緻で極めて良好。暗灰褐色。	口～頸部残存
12-4	壺	(12.0) —	横ナデ	斜長石・角閃石・白色砂粒を含む、焼成はやや不良。淡灰褐色。	口～頸部 1/3

図版 番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
12-5	壺	—	体部上半は横ナデ、 体部上半は回転ヘラ 削	斜長石・白色砂粒を含む、焼成不良。焼成は 不良。淡灰褐色。	体部 1/4
12-6	壺	22.5 48.4	口縁部横ナデ、胴 外面木目直交叩き 内面同心円当具痕	細砂若干、焼成は良好。灰褐色。	口縁部 5/6欠。底 部外面に焼成時に坯3 個を置いた痕跡が残る
12-7	壺	14.9	口縁部横ナデ、胴 外面平行叩き、 内面同心円当具痕	白色砂粒を含む、焼成は通有暗灰色。	口-胴部上半
12-8	壺	18.4 —	外面撫掻き波状文	白色砂粒を含む、焼成は通有暗灰色。	口-頸部 2/3
12-9	壺	— —	横ナデ	白色砂粒を含む、焼成は通有暗灰色。	口-頸部破片
12-10	壺	— —	横ナデ	雲母・白色砂粒を含む、焼成は通有。灰色 を基調とする。	口-頸部破片
12-11	壺	— —	横ナデ	斜長石・白色砂粒を含む、焼成は通有。灰褐 色。	口-頸部破片
12-12	壺	23.6 —	口縁部横ナデ、胴 外面撫掻き波状文 カキ目後横ナデ	斜長石粒少量、白色砂粒若干、焼成は通有。 灰色を基調とする。	口-頸部破片
12-13	壺	23.6 —	口縁部横ナデ、胴 外面撫掻き波状文 胴部平行叩	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色を基調と する。	口-頸部破片
12-14	壺	22.7 —	口縁部横ナデ、胴外面 物掻き波状文カキ目 後横ナデ胴部平行叩	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色を基調と する。	口-頸部 1/4
13-1	土師器 高坏	29.0	口縁部ナデ、体部 外面ハケ、内面ヘラ 削後、ナデ	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成通有。褐色。	底部、口縁部 1/4欠
13-2	土師器 壺	16.1	口縁部ナデ、体部 外面ハケ、内面ヘラ 削	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成不良。褐 色一褐色。	口-体部破片
13-3	土師器 壺	19.0	口縁部ナデ、内面 ヘラ削	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成不良。褐色。	口縁部 2/3
13-4	土師器 壺	—	口縁部ナデ、内面 ヘラ削	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成不良。赤橙 色。	口-胴部 1/2
13-5	小形瓶	6.9 6.8	横ナデ、底部外面 周縁を回転ヘラ削	白色砂粒やや多量、焼成は良好。灰褐色。	口-頸部 一部欠
13-6	小形 長頸壺	4.1 6.9	横ナデ、底部外面一方向 ヘラ削、口縁-体部内 面に斜方向のヘラ調整痕	白色砂粒若干、焼成は良好。灰褐色。	体部一部欠損
13-7	土師器 小壺	5.6 5.8	ナデ調整	斜長石粒を含む、焼成不良。黄褐色。	ほぼ完形
14-1	坏 蓋	12.0 3.2	天井部石回転ヘラ削	白色砂粒を微量含む、黒色炭粒粒。焼成通有、 灰褐色を基調とする。	口縁部 破片
14-2	坏 身	13.3 3.2	底部石回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色。	1/3
14-3	壺	(14.2)	横ナデ	色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色。	口縁部破片
14-4	壺	(22.2)	自然縮のため調整 不明	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色。	口-頸部破片

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
14-5	壺	— —	口縁部横ナデ、腹部外面カキ目後、帯掻き波状文	斜長石粒少量、白色砂粒を含む、焼成通有。灰褐色。	口—腹部破片
14-6	土師器壺	18.7	ナデ調整	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成不良。橙色。	口—腹部 2/3
14-7	土師質坏	(9.9) 2.4	ナデ調整、底部収状圧痕	斜長石粒、角閃石粒、白色砂粒を含む、焼成通有。橙色。	口—底部破片
14-8	土師質坏	(9.8) 2.6	ナデ調整	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成通有。橙色。	1/3
14-9	土師質坏	(10.0) —	ナデ調整、底部収状圧痕	斜長石粒、角閃石粒、白色砂粒を含む、焼成通有。淡橙色。	口縁部破片
14-10	瓦器柄	(14.7) 5.7	ナデ、体部下半指押さえ	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成通有。灰白色—黒灰色。	口—底部破片
14-11	瓦器柄	14.8 5.7	ナデ、体部下半指押さえ	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成通有。白灰色—黒色。	口—底部破片

表2 桐ヶ追遺跡灰原出土須恵器観察表

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
19-1	坏壺	13.4 4.5	天井部右回転ヘラ削	細砂若干、焼成良好、灰褐色を基調。	1/3 個体
19-2	坏身	(12.4)		細砂若干、焼成良好、暗灰褐色。	1/4 個体
19-3	坏壺	15.0 3.9	天井部右回転ヘラ削	砂粒若干、砂粒破裂痕、焼成通有、灰褐色を基調とする。	1/6 個体
19-4	坏身	(12.4) —		砂粒若干、砂粒破裂痕、焼成堅緻良好。暗灰褐色。	口縁部破片
19-5	坏壺	—	天井部右回転ヘラ削	砂粒・細砂若干、焼成は堅緻良好、灰褐色を基調とする。	1/5 個体
19-6	坏身	12.3 4.1	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成通有、暗灰褐色を基調とする。	1/5 個体
19-7	坏身	(12.7) —	底部右回転ヘラ削	細砂を含む、焼成通有、暗灰褐色。	口縁部 1/6
19-8	坏身	13.5 —		斜長石粒を含む、焼成通有、暗灰色。	口縁部 1/6
19-9	坏身	(14.0) —	底部右回転ヘラ削	石英粒・細砂若干、焼成堅緻良好。暗灰褐色を基調とする。	1/6
19-10	長頸壺	(10.4) —	横ナデ	細砂若干、砂粒破裂痕、焼成堅緻、暗灰色を基調とする。	口縁部破片
19-11	瓶			砂粒若干・細砂やや多量、焼成良好。	体部 1/2
19-12	壺	(19.2) —	横ナデ、腹部外面カキ目調整	細砂・砂粒若干、焼成不良、淡灰色。	口縁部 1/3

桐ヶ泊遺跡近世墓地（第20図～第25図、第27図～第30図）

墓地は丘陵の先端に近い西向き斜面やや上部に位置する。墓域は斜面上部を掘削し、平坦に整形されている。墓は3基造られており、南から周溝を伴う1号、2号、3号と位置する。

墓地の造営は17世紀後葉から19世紀前葉の間に行われたと考えられる。

1号墓 下部構造は円形墓坑で上部径0.96m、底面径0.7m、深さ0.5mの規模をもつ。底面はほぼ平坦をなす。墓坑内の埋土は上半部において急激な堆積が認められ、底面中央部に脂質によると思われる硬化範囲がみられた。遺物としては墓坑の底面付近の北寄に礫とこれに接して鐃杖1点、東寄に摩紫金製装の輪宝型の金物が6点、このほか銅銭6枚が出土している。

墓坑の上部には調査前に、径1.4mの範囲に高さ約1.3mの盛土を確認していた。しかし調査着手の直前に大半を掘削されるという事態が生じたため、十分な観察ができなかった。ただ盛土については、礫混じりの軟質黄褐色土が用いられていたことを確認している。また盛土の残存状況は裾の広がりが短いため、後世の改変を受けた可能性がある。

埋葬主体部を囲む周溝は、径5.5m～6mの円形に掘られおり、幅0.6m～1.3m、深さ0.03m～0.29mの規模をもつ。周溝は全周せず、西側で溝の両端が0.6mほど離れる。また斜面上寄りでは周溝が墓域の平坦面からさらに斜面の裾を切って掘られている。

2号墓 1号墓周溝の外縁から0.65m北に位置する。下部構造は上縁1.03m×0.82mの長方形、底面が0.49m×0.46mの方形を呈する。深さは1.57mである。

出土遺物は確認されていない。

3号墓 2号墓の西に0.3mの位置に近接して設けられている。下部構造は不整形を呈する土坑である。上縁は1.13m×1mで、底面は0.64m×0.63mの不整形を呈する。深さは1.5mである。出土遺物は、底面中央部から3種類の「寛永通寶」6枚が検出された。調査前の墓地状況については、建設省大分工事事務所が実施した「墳墓調査」から知ることができる。以下に示したものは、調査で確認した墓域および周辺の墓標の種類と数量である。墓石の種類は4タイプ7個である。Aタイプは基壇の上に位牌型墓標をもつもの（3基）。Bタイプは基壇の上に球状の自然石が伴う（2基）。Cタイプは方形の基壇のみが残る（1基）。Dタイプは方形錐状のものである（1基）。Dタイプについては自然石か石塔類の残欠か墳墓調査表の付図からは判断できない。このうち現存し、墓標と認定できるものはAタイプである。またこれらには銘文が刻まれている。

墓標1 正面 梵字（ア）大越家高林院養須（順？）大徳

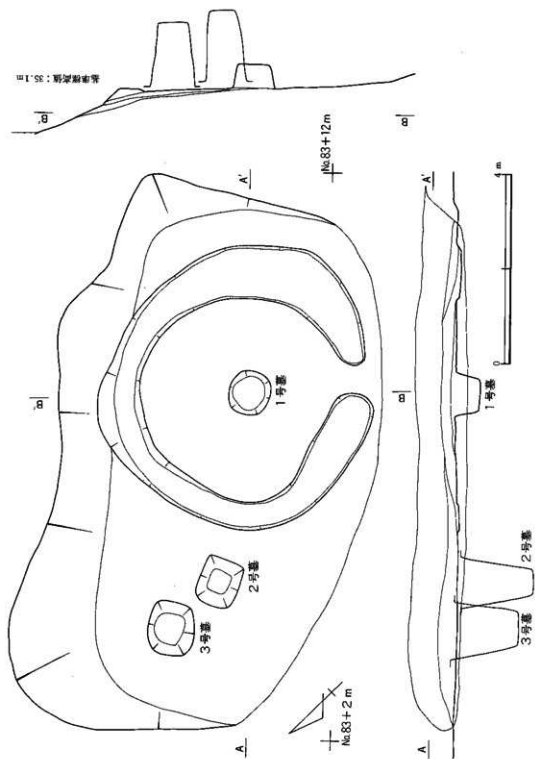
右側面 元禄二巳年

左側面 六月〇二日

墓標2 正面 梵字（ア）十輪房周全墓

右側面 文化十一甲戊天

左側面 九月十五日



第20图 桐ヶ迫遺跡近世墓地全体图

墓標3 正面 梵字(ア)大越家高林院養須(順?)大徳

右側面 寛延二巳年

左側面 五月十九日

墓標と下部構造の関係については、位置的に対応するものではないが、Aタイプ墓標3基は墓坑の数と一致しており墓標が二次的に移動した可能性が考えられる。このことを考慮して墓標と下部構造の対応関係を想定すると次のようになる。

墓標1→1号墓、墓標2→2号墓、墓標3→3号墓

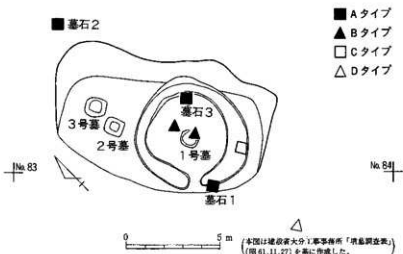
このように柄ヶ迫遺跡の近世墓地は墓標の銘文からみると、修験者を埋葬したことがほぼ確実であり、とくに1号墓は錫杖や袈裟金具の出土はこのことを補強するものである。

出土遺物(第26図、第31図、第32図)

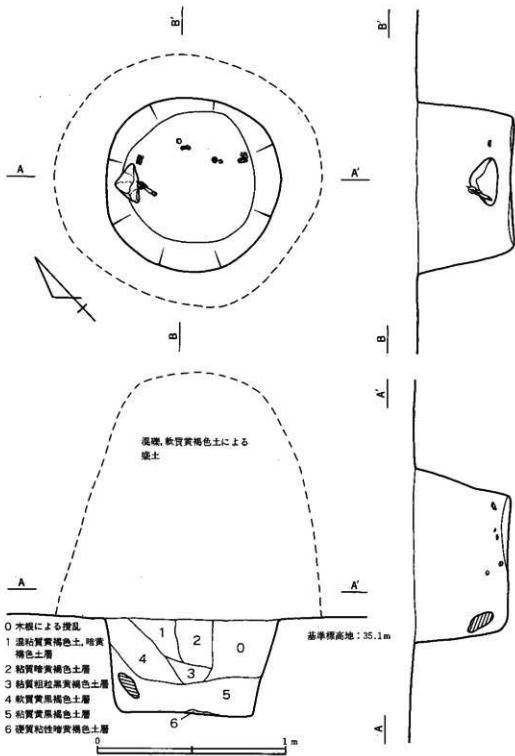
1号墓からは錫杖1点、袈裟金具6点、銅銭6枚が出土している。

錫杖は錫杖頭が完存し、杖部は一部が残存していたものである。手錫杖と考えられる。頭部は銅製で、総高14.7cmである。輪は高さ5.2cm、幅5.6cmで、四天の仰月形極が造りだされ、その内側に抉りをもつ。全体に巢文形を呈し断面形が変形になっている。輪頂に五輪塔を鋳出し地輪部分の表裏に「X」が刻まれている。輪の中央を通る柄頭は相輪形に表現され、基部から左右に簡略化された蕨手が伸び、その上部に形式的な相輪がつく。輪の下に続く柄は袋穂状に造られ、断面は八角形をなす。表面は四節に分けられ、その間に蓮弁が刻線で表現されている。蓮弁は稜線を中心にして刻まれ4展開する。柄の下端から2.6cmの位置に径0.3cmの柄穴があり、木質の目釘が杖部を固定した状態で残っている。遊環は輪の左右に2個づつ付く。大きさは径5cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmである。

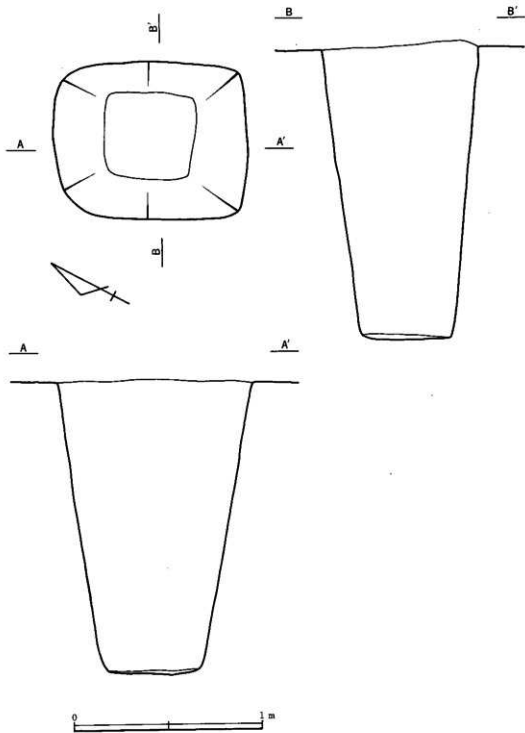
袈裟金具は摩紫金袈裟の輪宝型の金物(註)である。これに袈裟の一部が金物の範囲に限って鉄に留められ状態で残っていた。布には金糸を交えた織りが観察できる。網は径2.4cm、珠文16個が配されている。網の八方に長さ0.2cmの鋒が付く。幅は鋒と穀を



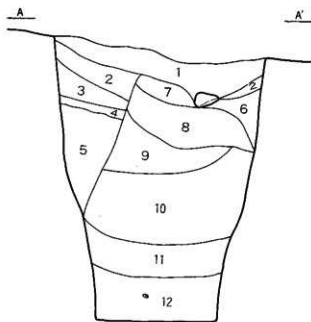
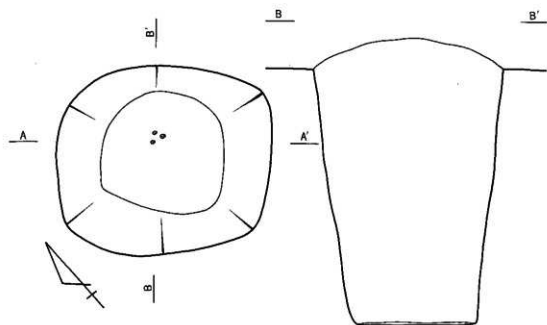
第21図 近世墓周辺墓石位置図



第22図 1号墓実測図



第23图 2号基实测图



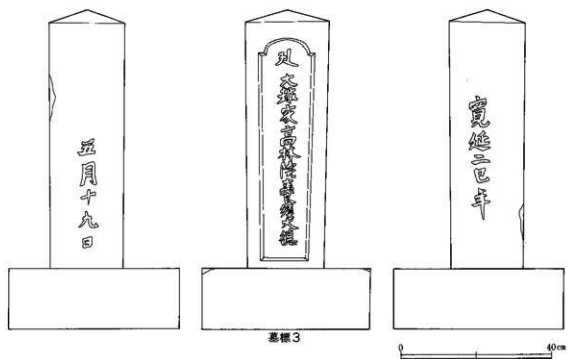
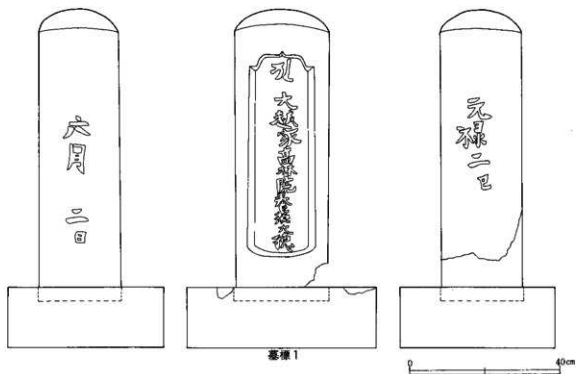
土層説明

- 1 粘質黄褐色土層
- 2 軟質黄褐色土層
- 3 軟質粘性膠結黄褐色土層
- 4 暗茶褐色土層
- 5 軟質粗粒暗黄褐色土層
- 6 軟質暗黄褐色土層
- 7 黄褐色粘質土層
- 8 扭拉軟質黑黄褐色土層
- 9 軟質ブロック状暗黄褐色土層
- 10 軟質暗黄褐色土層
- 11 湿赤褐色土ブロック若干暗黄褐色土層
- 12 粘質暗灰色土層

基準標高値：35.2m



第24図 3号基実測図



第25図 基標 1・2 実測図

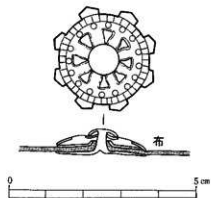
結ぶ線上に8本伸びる。鉄は径0.85cmの半球形で殻をなし裏側に脚部が付く。脚部は袈裟の布を貫通し折り曲げて留められている。金物が袈裟に装着された状態での厚さは0.7cmとなる。

銅銭は6点出土している。そのうち元豊通寶は1点、寛永通寶は古寛永4点、新寛永1点である。

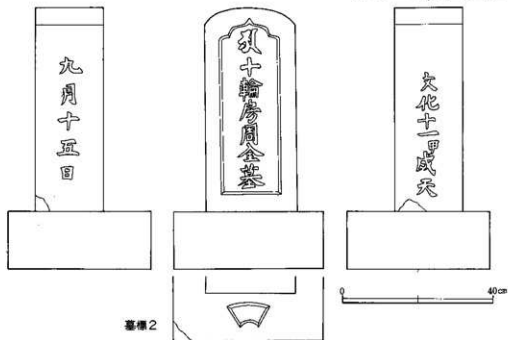
3号墓から出土した遺物は、銅銭のみである。銅銭は寛永通寶6点で、古寛永1点、新寛永5点である。このうち新寛永については、背面「元」が1点、「文」1点、無文3点の3種類を確認している。

注 輪宝の名処を用いた（『輪宝』『仏具辞典』

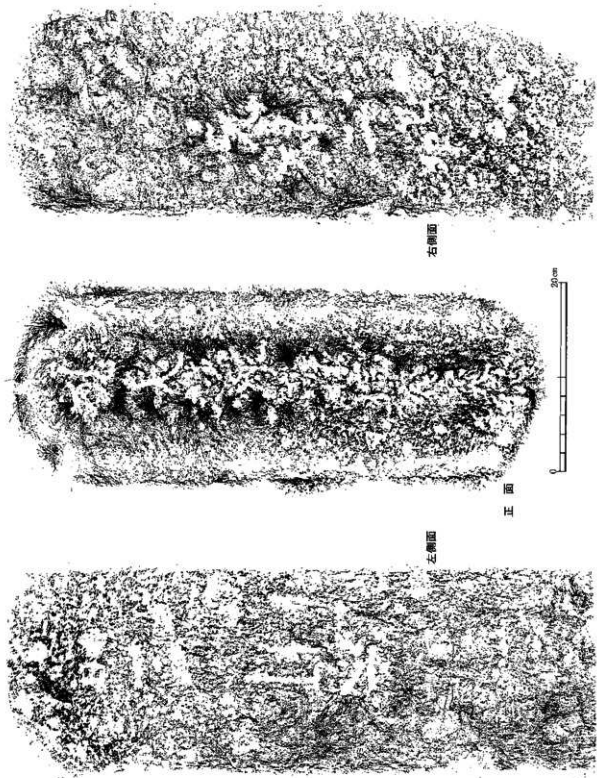
清水乞福、平成4年7版、東京）



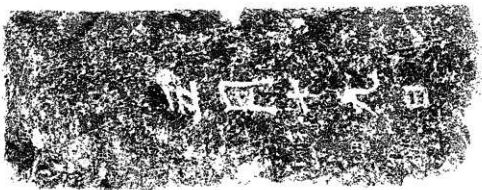
第26図 1号墓出土輪宝型金物復元図



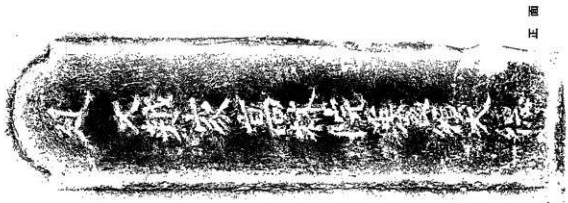
第27図 墓標3実測図



第28圖 墓碑1 拓影圖



左側面



正面



右側面

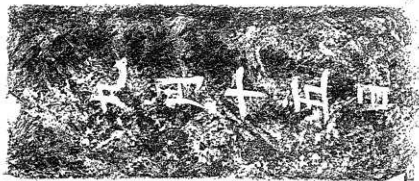
第29圖 蓋樽 2 拓影圖



右側面



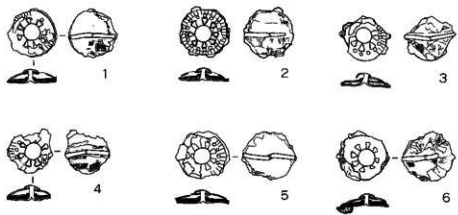
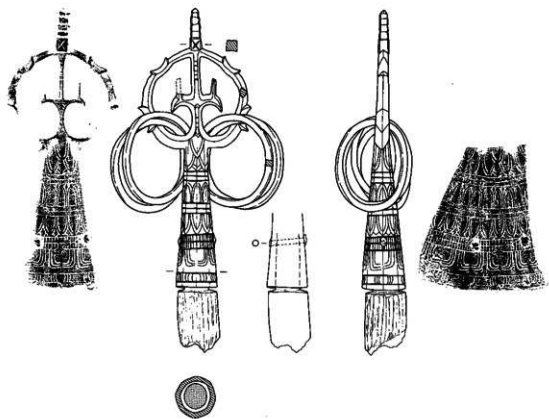
正面



左側面



第30回 墓標3 拓影図



第31图 1号墓出土遗物实测图

1号墓



3号墓



第32回 近世墓出土銅銭拓影

1号墓

№	銭名	分類	初铸年(西暦)	材質	形状	外径(mm)	内径(mm)	厚径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	元慶通寶	北条銭	元慶元年(1078)	銅	圆形	2.37	1.78	(0.70)	0.14	2.9	銅字が裏書体である
2	寛永通寶	古寛永	寛永3年(1626)	銅	圆形	2.47	1.92	0.66	0.16	2.4	
3	寛永通寶	古寛永	寛永3年(1626)	銅	圆形	2.47	1.92	0.59	0.16	3.1	
4	寛永通寶	古寛永	寛永3年(1626)	銅	圆形	2.44	1.92	0.59	0.18	3.3	
5	寛永通寶	古寛永	寛永3年(1626)	銅	圆形	2.38	1.92	0.60	0.14	2.5	
6	寛永通寶	新寛永背文	寛永8年(1688)	銅	圆形	2.52	2.04	0.60	0.18	2.2	逆字文

3号墓

№	銭名	分類	初铸年(西暦)	材質	形状	外径(mm)	内径(mm)	厚径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	寛永通寶	新寛永背文	寛永元年(1741)	銅	圆形	2.26	1.75	0.68	0.13	1.7	
2	寛永通寶	新寛永	光緒13年(1900)	銅	圆形	2.34	1.90	0.61	0.12	2.2	
3	寛永通寶	古寛永	寛永3年(1626)	銅	圆形	2.45	2.00	0.65	0.15	2.6	
4	寛永通寶	新寛永背文	寛永8年(1688)	銅	圆形	2.52	2.03	0.67	0.14	3.1	逆字文
5	寛永通寶	新寛永	光緒13年(1900)	銅	圆形	2.35	1.90	0.75	0.14	2.2	
6	寛永通寶	新寛永	光緒13年(1900)	銅	圆形	2.30	1.87	0.68	0.11	2.3	

表3 桐ヶ迫遺跡近世墓出土銅銭一覽表

2 峯添遺跡の遺構と遺物

峯添遺跡は桐ヶ追遺跡と同様に四日市台地から西に向って派生する樹枝状の丘陵上に位置する。この調査範囲は長く伸びているため地形によって南北2地区に分け、北からⅠ区、Ⅱ区と設定した。

Ⅰ区

Ⅱ区北西側の丘陵部がこの範囲である。調査は、対象範囲5155㎡のうち旧地形の残る3966㎡について行った。

遺構としては堅穴遺構1、炭窯1、土坑25、ピットなどを確認した。これらは丘陵の上半部に帯状に分布していた。

炭窯は調査区西部に1基残っていたものである。窯は規模が長さ3.66m、幅1.56mで確認面からの深さ0.355mの長大な形状をもつが、付帯施設は検出されていない。主軸方向は等高線を斜めに横切る方向である。床面はほぼ平坦面をなしている。窯内から土師器、須恵器の破片が数点出土している。炭窯の時期については出土土器を根拠とは必ずしもできるとはいえない。

須恵器については、8世紀前半に比定できる。また周辺からほかの遺物は出土していない。

堅穴遺構は東端部に位置している。出土遺物は覆土上層から下城式土器がまとまってみられた。下層からナイフ形石器や石核などが出土しており、この堅穴遺構について石器の示す時期の遺構として考える必要がある。

土坑は調査区全体に分布しているがピットは東部範囲に偏って分布する傾向がみられた。遺構内からの出土遺物は少なく、黒曜石の剥片、土器の細片が僅かに出土したにすぎない。またピットの分布は不規則であった。

出土遺物（第36図、第39図）

堅穴状遺構の上層から出土した甕（第36図-1・2）は、下城式土器の甕である。1は口唇が僅かに立ち上がる。口縁下に断面三角形の突帯が付く。

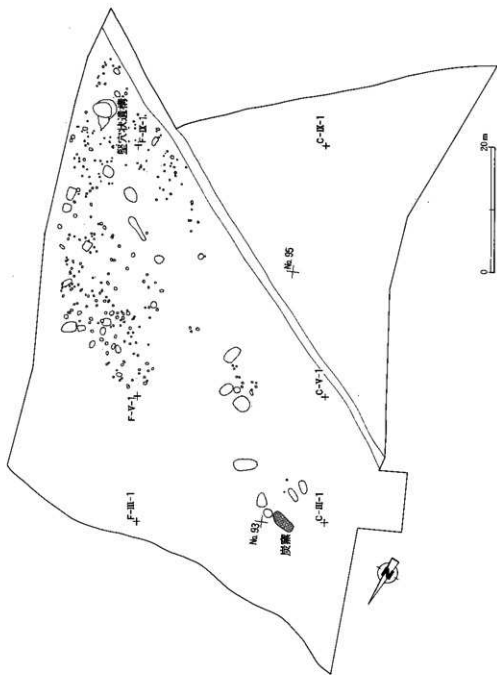
2は底部で縦方向のハケ目が施されている。

炭窯・周辺から出土した遺物（第39図）として8点を図示した。このうち須恵器6点はすべて蓋である。1は鈕が宝珠の退化した形状を示す。4は器高が高く口縁部の屈曲は弱い。7は天井部から口縁部にかけてS字状に屈曲する。8は器高が低い形状である。大きさは口径が復元できる4～8は14.3cm～16.4cmである。

土師器（2）は坏で内面にミガキ、外面にナデが施されている。

3は鉄製品の残欠であるが種別は不明である。

時期については、1、4～6が8世紀前半代、7・8は8世紀中葉以降と考えられる。



第34图 圣源路I区遗物分布图

竪穴状遺構と出土遺物（第35図・第37図）

竪穴状遺構（1号住居跡）は旧石器時代後期と弥生時代中期の遺構が重なりあって形造られていた。つまり旧石器時代遺構の真上に弥生時代の円形住居跡が造られていたのである。そのため、当初は弥生時代の円形住居跡として認識して調査を行っていた。その後調査が進行し、弥生時代遺物が見つかるレベルより下位に旧石器時代遺物が含まれていた。そこで、遺構の中央部に設定していた地層観察用の断面を検証したところ弥生時代住居によって切られる状況で旧石器時代遺構が存在していた。地層断面の検証と遺構平面の追求から、遺構は下記に示すような状態であった。

弥生時代の住居跡部分は削平のためか、竪穴の立上り部分が不明瞭であるが、おおむね直径が約33cm前後の規模を有する（第35図）。弥生時代の住居内にはほとり込まれる状況で旧石器時代遺構が位置する。その平面形と規模は、東西に長い楕円形で長さ320cm、短軸長250cmである。この旧石器時代遺構の床面には4つの柱穴があり、長方形な配置状況からみて上面に位置する弥生時代遺構に由来する主柱穴の可能性がある。

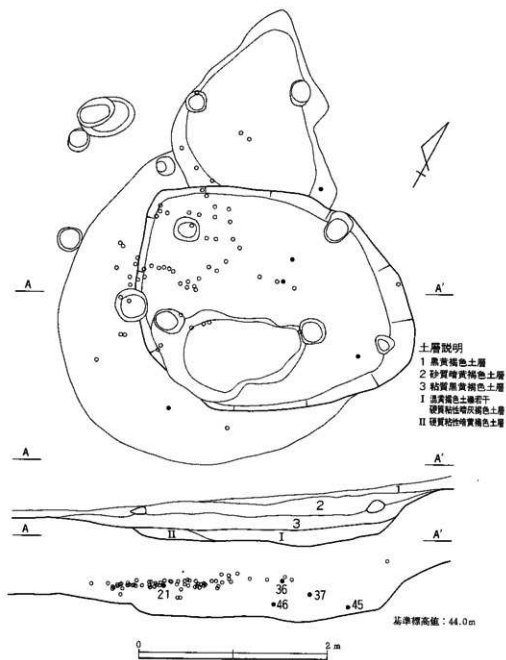
遺構内堆積土は、2層・3層が弥生時代遺構の覆土で、I層・II層が旧石器時代遺構の覆土である。したがって3層とI層の境界部分は、弥生時代遺構が旧石器時代遺構と切合った部分の床面となる。遺構内堆積土のおおまかな特質は、2層・3層が暗黄褐色～黒黄褐色系の砂質・粘質土なるのに対し、I層・II層は粘性暗灰褐色～粘性暗黄褐色系の砂質土である。遺構内堆積土のうち2層・3層に弥生時代遺物の存在は限らる。I層・II層においては弥生時代遺物は全く存在せず、旧石器時代後期の遺物が包含される。なお床面には炭化物が分布していた。

以上、上部の竪穴状遺構と下部の竪穴状遺構について記載してきたが、次に、見つかった石器の特徴と出土状態との関わりに触れてみたい。さて上部遺構は見つかった土器から弥生時代中期に属することはすでに触れているが、石器類も特徴的な例がでている。そのわけは、やじり2点（鉦島産黒曜石2点）、やじり未製品・製品32点（鉦島産黒曜石32点）、剃片25点（鉦島産黒曜石24点、ガラス質安山岩1点）である。こうした石器類は石器の種類と石材から、縄文時代か弥生時代のどちらかに所属することになろう。上部遺構内では明確に縄文時代と推定できる土器はなく、石器類に見合う土器は弥生時代中期の土器だけである。したがって上部遺構に残された石器類は弥生時代中期に属すると考えるのが自然であろう。そこで上部遺構の性格は弥生時代中期のやじり製作場所といえる。

下部遺構から見つかった遺物は9点有る。この中には本来下部遺構に由来する遺物が攪乱や浮き上りを経て上部遺構覆土内で見つかった例を含めている。

ナイフ形石器：形態が水滴形をした1例が見つかった（第37図1）。整形剥離痕は左側縁の全域と右側縁の下半に若干ある。主要剥離面側に二次的な調整剥離もある。刃部は右側縁の上半であるが、台形様石器といえないでもない例である。石材はメノウ。重さは4.7g。

剃片：横長と縦長の2例が見つかった（第37図2・4）。重さはそれぞれ2.0g、3.8gであ



第35圖 I区豎穴狀遺構實測圖

る。石材は金山産のサヌカイトである。

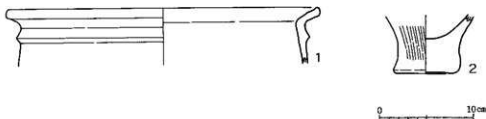
加工痕のある剥片：縦長の不定形剥片が素材である（第37図3）。左側縁より、縁が鋭い右側縁の突出部に若干の加工痕がある。石材は多久産のサヌカイトと思われる。重さは17.3gである。

使用痕のある剥片：縦に長い不定形剥片素材である（第37図5）。右側縁とこれに接する表には細かい剥離痕があるが、これは剥片剥離以前に行われた接面作作業痕であろう。使用痕は縁の鋭い左側縁の裏面側にある。石材は鉄石英。重さは13.6g。

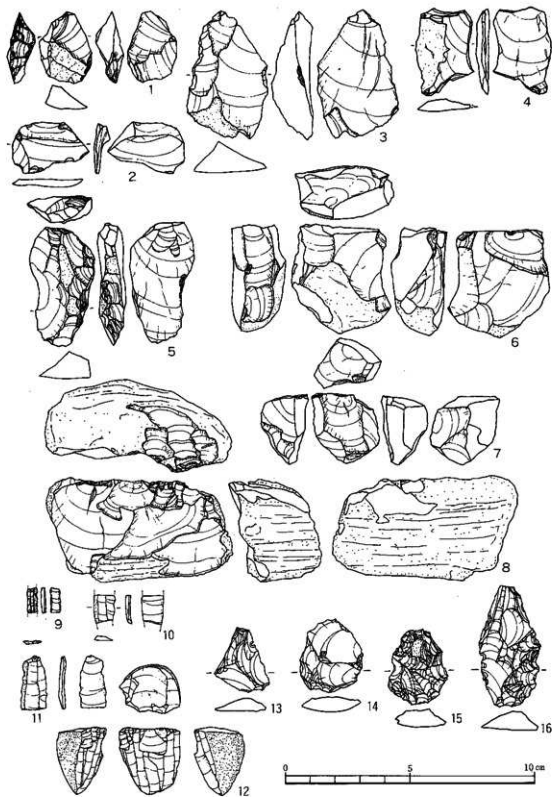
石核：3個ある（第37図6～8）。1例は約2cm程度の厚さの剥片に打面を作る。ここから小口方向または表裏両面方向から剥片をとる。重さは38.9gで、石材は流紋岩に似ているがはっきりしない（第37図6）。もう1例はプリズム形となった残核である。重さは13.1gで、石材はアジュライトか石英である（第37図7）。3例目は棒状の角礫を横位に用い、傾斜する自然面を打面として剥離するが、打面に若干の調整を行っている（第37図8）。重さは99.6gで、石材は腰岳産黒曜石である。

また近隣の遺跡である桐ヶ追遺跡においても旧石器時代後期の遺物が採集されている。細石刃が3点と、細石刃用石核である（第37図9～12）。石材はいずれも黒色の黒曜石であるが、細石刃用石核を除いては原産地の推定ができない。細石刃用石核は小円礫の特徴をもった自然面の存在から佐賀県牟田産と推定できる。細石刃用石核は、打面作作業のほかは石核調整を施さず、細石刃剥離をう。これは野岳・休場型細石核の範疇にある例で、重さは13.2gである。細石刃の重さはそれぞれ0.1g、0.2g、0.6gである（第37図9～11）。

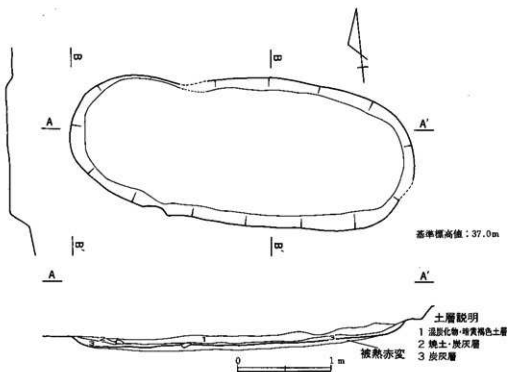
さて壑穴状遺構出土石器の時期について、その特徴からみてみよう。まずはっきりと時期が推定できる遺物はないが、大野川流域で駒方古屋（A T以前）段附から多用される流紋岩がないことに特徴がある。また見方によってはナイフ形石器を台形様石器とできれば、駒方古屋段附以前に位置づけられる可能性がある。なお遺構は一定のプランと居住できる規模を有していることと、旧石器以外の遺物を含まない点から旧石器時代の住居跡と言ってよいだろう。



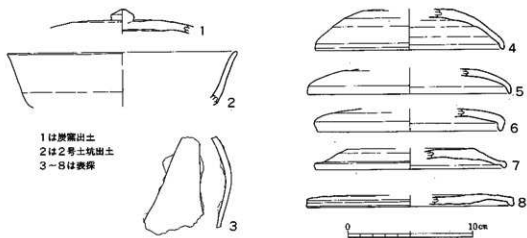
第36図 I区壑穴状遺構上層出土遺物実測図



第37图 I区豎穴状遺構出土石器・関連資料実測図



第38図 I区炭窯実測図



第39図 I区炭窯・周辺出土遺物実測図

Ⅱ区

I区の南東部に位置する。遺構は丘陵の上半部に大半が分布していた。この範囲において、竪穴住居跡4基、周溝状遺構2、炭窯1、土坑、不整形の落ち込み、ピット、近世墓地などを確認した。このうち竪穴は竈をもち、出土土器からみて6世紀後半に位置付けられる。周溝状遺構は2基あるが、遺物は伴っていない。

竪穴住居跡 今回の調査では竪穴住居跡を南地区の南半部に4基確認した。このうち1基は3壁と竈を欠いておりその構造は不明であるが、他の3基は北壁に竈をもつ。このなかでは1号住居跡が最もよく残っていた。

1号竪穴(第41図) 南北5.0m×東西3.7mの長方形プランをもつ。主軸方向は北15度西を指向する。壁の高さは0.08m～0.2mほど残っていた。しかし北東、南西隅付近は木根によって広く攪乱を受けていた。

竈は北壁のほぼ中央に付設されていたが、確認時にはすでに崩壊しており竈用材としての白色粘質土が袖部に若干残る程度であった。ただ両袖には芯となる角礫が残っていた。火床面は比較的残存状態が良く、支脚の一部が出土している。柱穴は4個で、各隅を結ぶ対角線上にほぼ位置する。

竪穴内の出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は崩壊後の竈上および周辺から壺、甑、寛などが出土している。須恵器は覆土中から坏類が若干出土している。

2号竪穴(第42図) 南北2.82m×東西3.72mの長方形プランをもつ。主軸方向は北97度西を指向する。壁の高さは0.08mほど残っていた。北東隅は土坑が切り合っている。

竈は西壁の南西寄りに付設されていたが、南半部を削平され右袖と火床の右半部の残すのみである。袖には白色粘質土が用いられていた。柱穴は2個で、1.7mの間隔であった。

3号竪穴(第43図) 南北3.9m×東西3.5mの方形プランをもつ。主軸方向は南24度西を指向する。壁の高さは0.12mほど残っていた。

竈は南壁のやや西寄りに付設されていた。南壁を0.4mほど掘り込んで構築されていた。攪乱によって袖を失っていたが、火床内に石製支脚1点が残っていた。

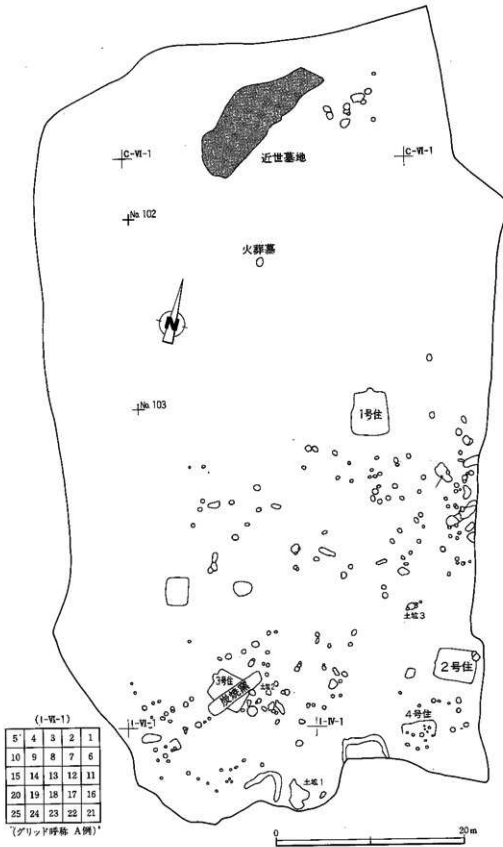
主柱穴は4個であった。

4号竪穴(第44図) 調査区の最も南側に位置する。南半部は後世の掘削によって消失している。東西3.7mの規模をもつ。壁の高さは0.2mほど残っていた。

主柱穴になるとと思われるピットは残存床面において2個確認されているが、恐らく4本柱と考えられる。

炭窯(第45図) 調査区南東部に位置し、3号竪穴を切って構築されている。全長6.6m、幅1.1m～1.5m、深さ0.2mの規模である。

周溝状遺構 調査区南部に2基検出した。1号周溝は東西5mで南半部は掘削によって消失し

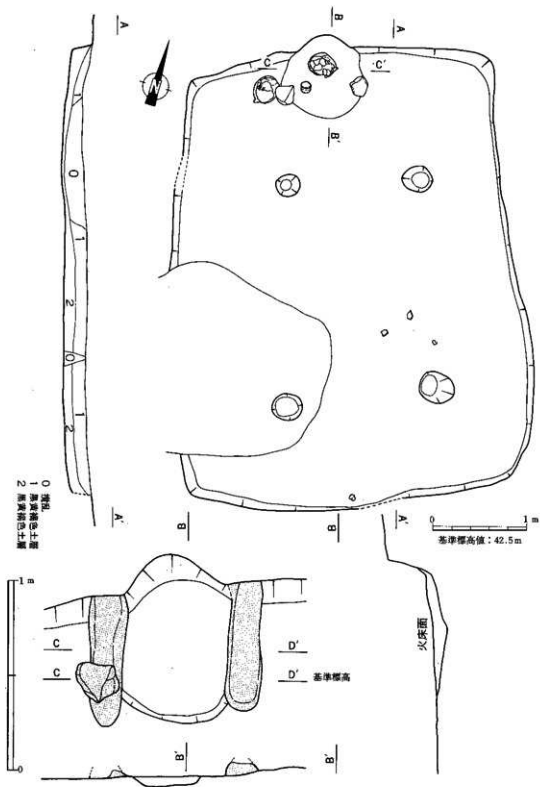


(I-VI-1)

5	4	3	2	1
10	9	8	7	6
15	14	13	12	11
20	19	18	17	16
25	24	23	22	21

(グリッド呼称 A例)

第40図 東浜通跡II区遺構分布図



第41图 II区1号竖穴实测图

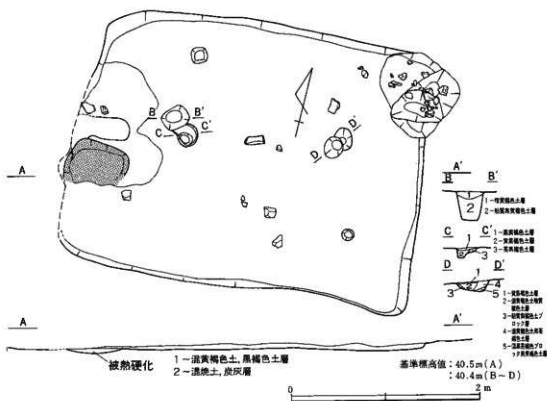
ている。溝の幅は0.3m～0.6m、深さは0.05m～0.1mである。

2号周溝は全周せず弧状の形態を呈する。溝の幅は0.4m～0.7m、深さ0.06m～0.1mである。
 火葬墓(第47図) 長径0.83m短径0.72mの不整形円形を呈し、深さは0.4mである。墓坑内には礫を多く含む炭灰層が堆積していた。骨片はみられないが、火葬墓の可能性が高い。

出土遺物(第48図、第49図)

第48図に掲載した実測図は、1が土坑1、2は土坑3、3・4は2号土坑、5～9は表探である。1は土師器坏である。大きさは口径12.8cm、器高4.1cm。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は不良である。2は甑の胴部上半～口縁部の破片である。口径12.6cmである。3～4は胴部上半～口縁部の破片である。口縁部はくの字に屈曲する。5～9は須恵器である。5は坏蓋で天井部と口縁部の境に沈線が巡る。口径14.4cmである。6は坏の脚部破片、7は埴で底部を欠失する。8は甕の口縁～頸部破片で外面に葡萄描き波状文が施される。9は横瓶の体部破片で外面にカキ目状の調整、端部にヘラ削りが施されている。

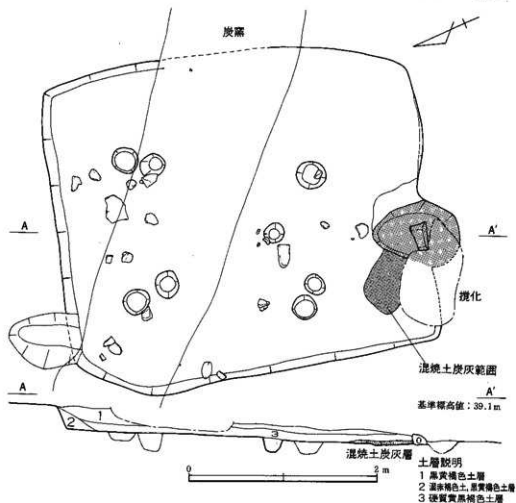
須恵器は胎土に角閃石、斜長石を含み、色調は灰褐色を基調とし、焼成は概ね良好である。出土遺物の時期については1号竪穴攪乱範囲出土遺物が8世紀後半代を示すが、ほかには6世紀後半



第42図 Ⅱ区2号竪穴実測図

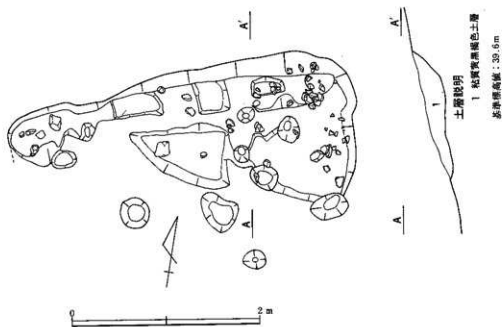
と考えられ、竪穴の時期を示すものと思われる。

1号竪穴から第49図1～8が出土した。このうち1～5は竈周辺から出土したものである。1は須恵器坏壺の口縁部である。器壁は薄く、天井部へは緩やかな曲線をもって移行するものと思われる。2は須恵器短頸壺で口縁部付近が残っていた。口径11.4cmである。3は土師器の壺で小型品である。大きさは口径10.8cm、器高9.7cmである。口縁部は緩く外反し、体部はあまり張らない。底部は丸底となっている。整形は外面において器面の荒れが著しく不明であるが、内面は底部付近に指頭痕によるナデがみられる。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は橙色を呈し、焼成は通有である。4は土師器甗で器高24.8cm、復元器高31.3cm、穿孔径12.6cmである。胴部は長胴で牛角状の把手をもつ。穿孔部は単孔である。内面に指頭によるナデがみられる。胎土に角閃石を多量に含む。暗褐色を呈し、焼成は通有である。5は土師器の甗で卵形を呈し、緩く外反する口縁部をもつ。器高36.5cm、復元口径14.3cmである。外面にナデ、内面に縦方向のヘラ削りが

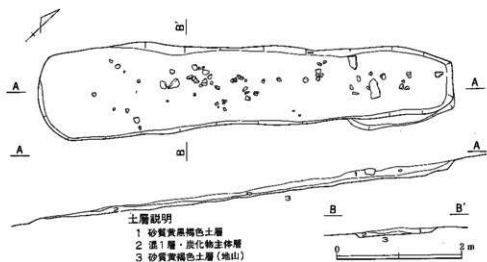


第49図 II区3号竪穴実測図

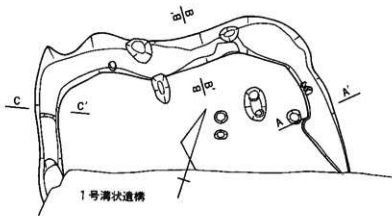
施される。胎土に角閃石を含み、赤褐色を呈し、焼成は通有である。6～8は整穴の攪乱範囲から出土した。6・7は須恵器蓋で、6は低平な宝珠鈕をもち、口縁端部は明確な屈曲をせず伸びる。大きさは口径15.8cm、器高2.2cmである。7は嘴状に屈曲する口縁部をもつ。8は土師器



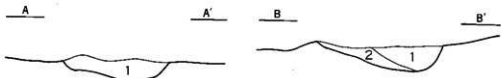
第44図 II区4号壜穴実測図



第45図 II区炭壜実測図

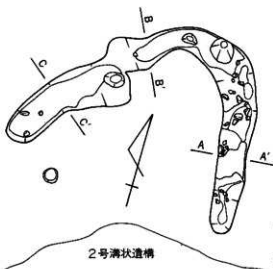


1号沟状遗構



土層說明

- 1 粘質黑黃褐色土層
 - 2 混黃褐色土層黃褐色土層
- 基準標高值：38.7m

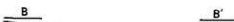


2号沟状遗構

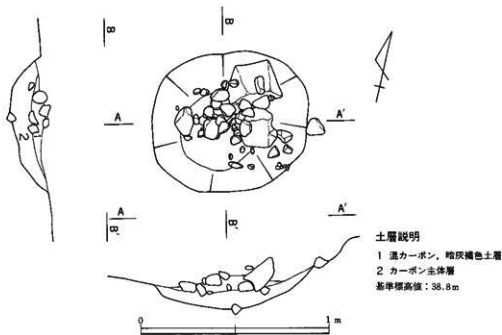


土層說明

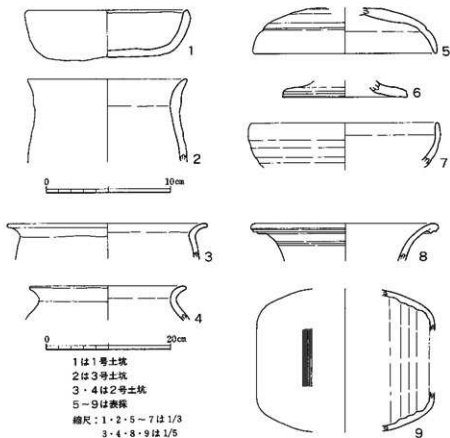
- 1 粘質黑黃褐色土層
- 基準標高值：38.3m



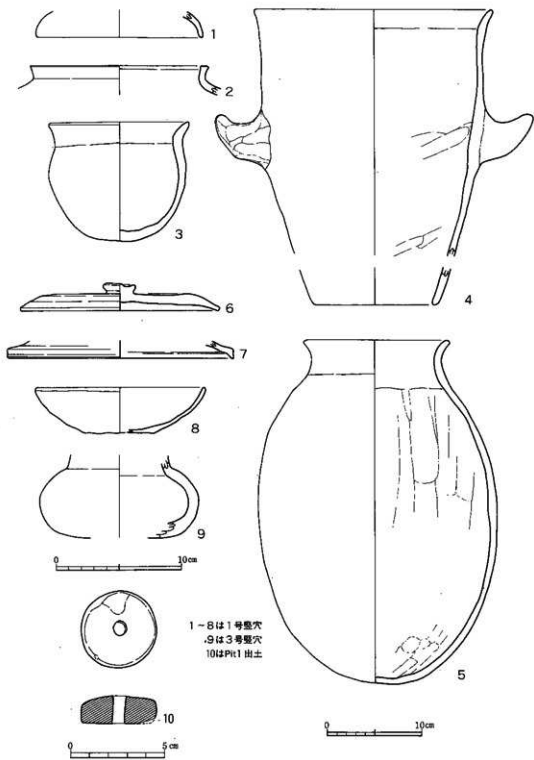
第46图 II区沟状遺構実測图



第47図 II区火葬墓実測図



第48図 II区土坑出土、表探遺物実測図



第49図 II区1号、3号壺穴、ピット出土遺物実測図

橙色を呈すが、焼成は不良である。

9は3号堅穴出土の土師器小壺の体部である。10はピット1出土の滑石製の紡錘車で、径4.1cm、厚さ1.5cm、孔径0.6cmの大きさである。

峯添遺跡Ⅱ区近世墓地（第50図～第56図）

四日台地西部において展開する樹枝状の丘陵部には、近世、近代の墓地が形成されている。墓地は丘陵上の造られており、西部の平野を望む位置にある。

峯添遺跡ではⅡ区の北部西向き斜面中腹付近に近世墓地が造られていた。墓地は斜面中腹を掘削した後に、再び埋めて平坦に整形されている。墓地の範囲は15.4m×1.8～3.5mで帯状を呈している。この範囲に上部施設である墓標などが一定の配列をもたずに散在していた。

上部施設 墓標は3基確認できるのみで、残りは何群かみられる礫の集積であった。墓標は墓地の中央部に1、2号が隣接して置かれており、3号はやや離れて南部に位置する。礫の集積は下部施設の分布とほぼ重なる。北部では径0.5m程度の角礫、円礫の配されている箇所がみられる。中央部でも同様にやや大きめの角礫、円礫と小礫が集中している。この下部には墓坑や骨蔵器がみられる。

下部施設 墓坑、骨蔵器など埋葬遺構として確実なものは28基で、ほかに土坑1基を確認している。墓坑には円形と方形の2種類がある。方形の例は8基で、深く掘られた墓坑となっている。円形の墓坑は3基が径、深さ共に0.6m以上の規模をもつ。円形の掘形は骨蔵器を伴う例が6基あり、ほかの9基は径0.6m以下と小規模で骨片が出土している例もあり恐らく火葬墓と考えられる。

遺構の切合い関係 墓坑の構築順序については、切合い状況から次のように確認できた。

29号墓→17号墓、18号墓→27号墓、24号墓→3号墓、25号墓→22号墓のようになる。

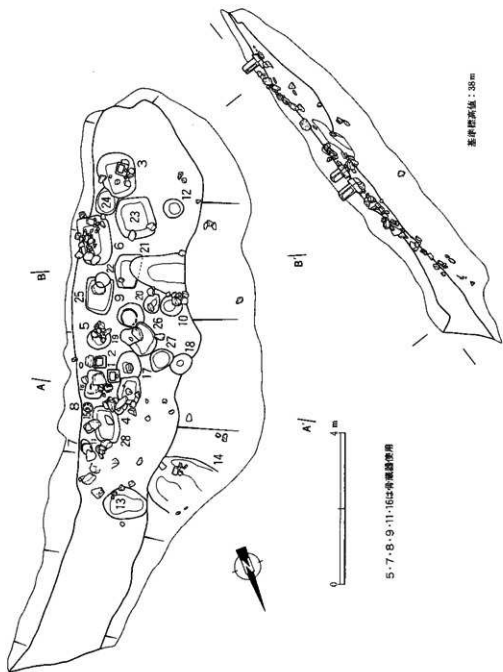
墓標 現存するのは3基で位牌型の形態である。

個別の墓遺構（第52図～第56図）

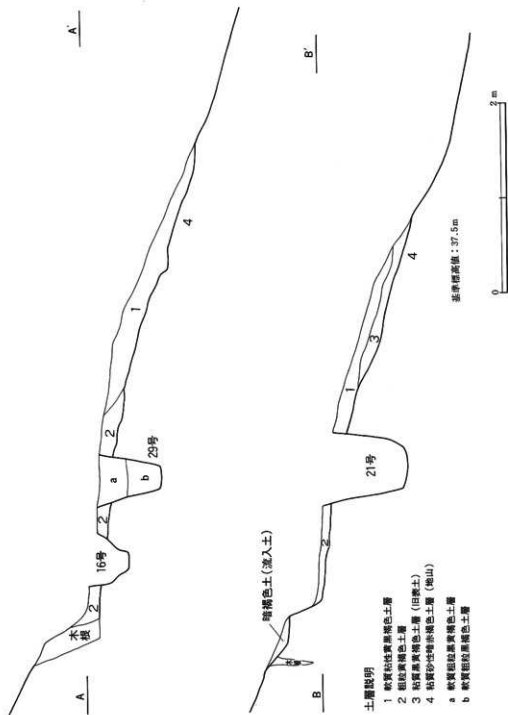
1号墓（第56図） 墓標のみで下部に施設を伴わないが、墓地の形成に伴って移動されたものであろう。墓標は形態は位牌型で、高さ45cm、幅20.2cm～23cm、厚さ14cm、台座は高さ13.6cm、横32.5cm、縦29cmの大きさである。正面に「釈圓教」、右側面に「寛政二年（1790年）」、左側面に「戊四月六日」の銘が刻まれている。

2号墓（第56図） 1号墓と同様に下部に施設を伴わない。墓標は高さ34cm、幅18cm～20cm、厚さ17cm、台座は高さ16.5cm、横31.6cm、縦31.4cmの大きさである。正面に「釈妙（甫）」、右側面に「宝暦四年（1754年）」、左側面に「二月十日」の銘をもつ。

3号墓（第53図、第56図） 墓標は高さ42.5cm、幅19cm～22cm、厚さ15.5cm、台座は高さ13cm、横32cm、縦30cmである。正面に「釈妙保」、右側面に「寛政十年（1798年）」、左側面に「十一月廿六日」の銘をもつ。墓坑上部に礫が若干散乱する。下部の墓坑は上縁が1.2m×1mの偏楕円形を呈し、深さ1.1mでほぼ垂直に掘られており、底面は0.8m×0.6mの長方形である。出土



第50図 II区近世墓地全体図



第51圖 II区近世基地範圍土層断面図

遺物として、鉄釘8点が底面の縁辺部から検出されている。

1、2、3号墓の背面にはともに銘文がなく整形痕が残っている。

4号墓(第52図) 墓坑の上に石が数個置かれていた。墓坑は径0.35mの円形を呈し、深さ0.2mである。骨蔵器は検出されていない。

5号墓(第52図) 火葬墓である。掘形の上に礫が10個ほど集積されており標識的な意味合い考えられる。掘形は長径0.6m×短径0.57mの円形で、深さ0.13mの規模をもつ。このなかにコネ鉢利用の骨蔵器である。骨片が若干出土している。

6号墓(第52図) 墓坑上部に礫が集積していた。墓坑は上縁が1.3m×0.85mの不整形を呈し、深さ1.1mで、底面は0.83m×0.43mの長方形である。

7号墓(第52図) 火葬墓である。掘形周辺に若干の礫が置かれていた。掘形の上部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は長径0.5m×短径0.27mの楕円形で、深さ0.15mの規模をもつ。このなかに甕利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。

8号墓(第52図) 火葬墓である。掘形の上部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は長径0.3m×短径0.27mの楕円形を呈し、深さ0.15mで骨蔵器の大きさほぼ同じ規模となっている。このなかに甕利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。

9号墓(第52図) 火葬墓である。掘形の上半部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は長径0.72m×短径0.65mの円形を呈し、深さ0.1mである。このなかにコネ鉢利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。

10号墓(第53図) 周辺に礫が集中していた。墓坑は0.6m×0.55mの円形を呈し、深さ0.3mである。規模は小さいが、骨蔵器は検出されていない。20号墓と隣接する。

11号墓(第52図) 火葬墓である。周辺に礫が若干みられた。掘形の上半部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は径0.3mの円形を呈し、深さ0.12mで骨蔵器の大きさほぼ同じ規模となっている。このなかに甕利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。7号墓と隣接する。

12号墓(第54図) 墓坑は長径0.54m×短径0.5mの円形を呈し、深さ0.36mである。規模は小さいが、骨蔵器は検出されていない。

13号墓(第55図) 墓坑は1.17m×0.87mの偏楕円形を呈し、深さ0.2mである。平面規模に比較して残存壁高が低く、骨蔵器も検出されていない。

14号墓(第55図) 墓とする明確な根拠はない。墓地整地範囲の西縁辺から斜面にかけて位置する不整形の落ち込みである。残存する規模は、16m×1.4mで、底面は斜面下に向かって傾斜する。堆積土は1層軟質暗褐色土層、2層粘質暗黄褐色土層、3層粘質粗粒黄褐色土層となっており自然の堆積状態を示している。

15号墓(第52図) 墓坑は0.34m×0.31mの円形を呈し、深さ0.07mである。骨蔵器は検出さ

れていないが、歯を含む骨片が出土している。

16号墓(第52図) 掘形の上に、長さ0.12m～0.32mの石が5個配されていた。また至近地に1号、2号の墓標が置かれている。墓の形態は火葬墓であるが、先行する墓と重複している可能性がある。掘形は0.75m×0.45m、深さ0.4mの規模で長方形を呈する。掘形内のやや短辺寄りに骨蔵器を埋置した径約0.3m、深さ0.13mの円形掘形が造られている。骨蔵器は下半部を円形掘形内に、上半部を長方形掘形内に置いた状態となっている。骨蔵器は甕を利用している。

17号墓(第55図) 29号墓を切って造られている。墓坑は長さ約0.8m×0.65m不整形円形を呈する。深さ0.65mで、底面は0.4m×0.34mの方形である。

18号墓(第53図) 27号墓に若干切られた状態で検出された。径0.5m～0.62m、深さ0.3mの規模をもつ円形土坑である。骨蔵器は検出されていない。

19号墓(第53図) 正確な規模は不明であるが、残存部分から推定すると、長径0.6m×短径0.45mほどの楕円形を呈すものと思われる。深さは0.3mと浅い。骨蔵器は検出されていない。

20号墓(第53図) 10号墓に隣接して造られている。長径0.6m×短径0.4mの楕円形を呈し、深さ0.2mである。土坑内から骨片が出土している。

21号墓(第54図) 墓坑は0.9m×0.65mの不整形方形を呈し、深さ0.88mでほぼ垂直に掘られている。底面は0.7m×0.45mの不整形方形である。

22号墓(第54図) 25号墓を切って造られている。土坑は長径(0.6)m×短径0.5mの楕円形を呈し、深さ0.55mである。

23号墓(第53図) 3号墓、24号墓に隣接して造られている。墓坑の上に礫2個がみられた。墓坑は1.1m×1mの不整形方形を呈し、深さ1.05mで底面は0.72m×0.64mの不整形方形である。出土遺物として、鉄釘12点と鉄製金具1点が底面の縁辺部から検出されている。

24号墓(第54図) 3号墓に切られている。土坑は長径0.7m×短径0.55mの楕円形を呈し、深さは0.55mである。

25号墓(第54図) 22号墓に切られている。土坑上部に大きめの礫が1個置かれた。土坑は0.94m×0.7mの長方形を呈し、深さ1.06mで底面は0.78m×0.58mの長方形である。

26号墓(第53図) 土坑は楕円形を呈し、規模は長径0.88m、深さ0.11m程度である。

27号墓(第53図) 18号墓を切って造られている。長径0.62m×短径0.54mの不整形円形を呈する。深さ0.16mと浅いが、骨蔵器は検出されていない。

28号墓(第54図) 墓坑は1m×0.65mの長方形を呈し、深さ0.6mで底面は0.73m×0.43mの長方形である。

29号墓(第55図) 17号墓に切られている。墓坑は0.75m×0.64mの長方形を呈し、深さ0.72mで、底面は0.52m×0.36mの台形状となっている。

骨蔵器(第57図)

1は5号墓、2は9号墓、3は16号墓、4は8号墓、5は7号墓、6は11号墓の骨蔵器に用いられたものである。

1はコネ鉢のほぼ完形品である。低く丸い体部をもち、口縁部は外反する。高台は丸みをもち貼付けられている。大きさは口径35.2cm、器高1.07cm、高台径15.7cmである。調整は、口縁部が横ナデ、体部上半は回転方向の削り、体部下半～底部はナデ。内面は体部の上部にヘラミガキが施される。

2はコネ鉢でほぼ完形品である。低く丸味を帯びた体部をもち、口縁部は短く外反する。体部の中程に刻み突帯を巡らす。突帯は断面台形を呈する。高台は断面が三角形に近い形状である。底部には幅1.4cmの低い突帯が巡る。大きさは口径43cm、器高12.2cm、高台径18.2cmである。調整は、口縁部外面が横ナデ、体部～底部には回転方向の削りが施されている。内面は横方向のヘラミガキがみられる。

3は甕のほぼ完形品である。胴部が口縁部に向かって緩く狭まる。口縁部は台形状に肥厚し、上端で平坦面をなす。底部はやや上底状で縁辺において接地する。底径が大きく安定感のある形態である。調整は外面に斜方向の削り後、ナデが施され、内面では上部に指押え、下半部にナデがみられる。胴部内面には横方向の板ナデ痕も認められる。大きさは口径17.5cm、器高26cm、底径21cmである。

4は甕のほぼ完形品である。胴部が緩く立ち上がる。口縁部は台形状に肥厚し、上端はやや凹面をなす。底部は上底状となっており縁辺部で接地する。胴上部に突帯は巡る。調整は口縁部にナデが施され、胴部上半に横方向の削り、下半部には縦方向の削り後横方向の削りがみられる。底部はナデで、縁辺に削り後のナデ調整がなされている。胴下半部には板状工具による縦方向のナデ調整が行われている。大きさは口径18.7cm、底径14.4cmである。

5は甕で胴部上半と下半は同一個体と考えられる。胴部は直線的に立上がり、頸部に緩い曲線をもって移行する。肩部に刻み突帯が巡る。口縁部は台形状に肥厚し、上端は平坦面をなす。底部はやや上底状で縁辺において接地する。調整は口縁部にナデ、肩部に斜方向の削り後ナデ、胴部下半には縦方向の削り後横方向の削りがみられる。底部は、縁辺に削りがなされている。内面には削り後ナデ調整が行われている。下端に指押さえによる整形がみられる。大きさは口径24cm、器高26.7cm、底径19.2cmである。

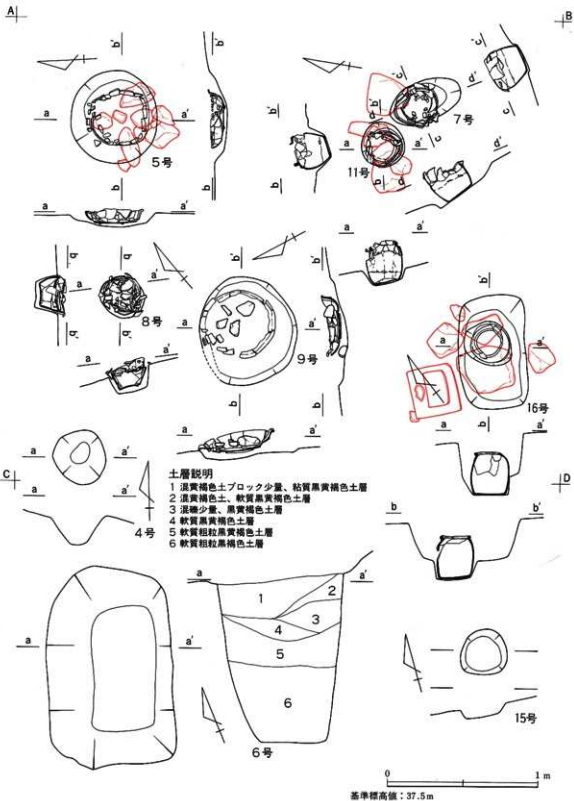
6は甕のほぼ完形品である。胴部は球状に近い形態で立上がり肩部に刻み突帯が巡る。頸部は直線的に伸び、口縁部は台形状に肥厚し、上端は平坦面をなす。底部はやや上底状で縁辺において接地する。調整は口縁部にナデ、胴部削り後ナデがみられる。内面には削り・ナデが施される。大きさは口径15.5cm、器高24.8cm、底径16.6cmである。

1～6は胎土に角閃石・斜長石・白色砂粒を含む。焼成はほぼ良好で、黄褐色～橙色を呈する。出土遺物（第58図）

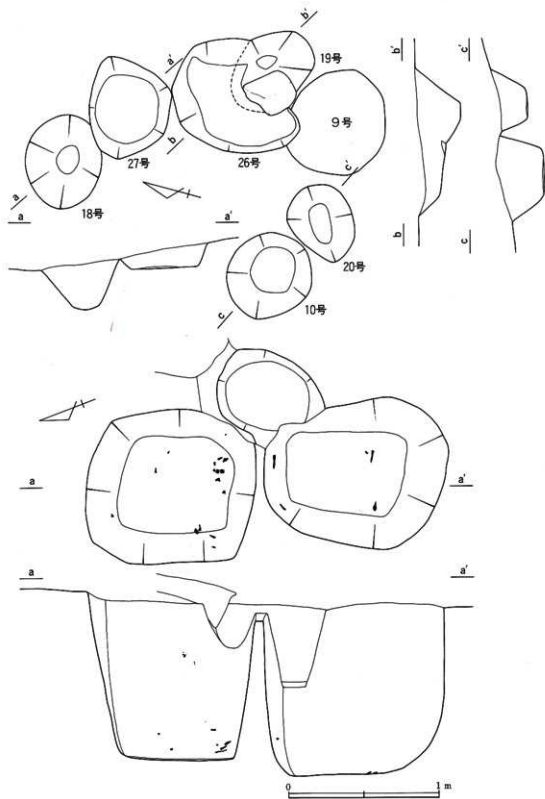
3号墓から鉄釘(1~8)、23号墓鉄釘(9~21)と金具(22)が出土した。このほか人骨が5・7・8・9・11・15・16・20号墓から出土している。20号墓以外はすべて骨蔵器に納められていたものである。なお人骨の分析については、5・7・8・11・15・16号墓の6例を対象として実施した。その結果は、本報告第5章2に掲載している。

鉄釘1~5は完存しないが長さ8cm以上と想定され、厚さは頭部下で0.7cm~0.8cm、方形断面をもつ大型品である。釘頭部は方形に造られている。6~21は長さ3cm~4cm、厚さは頭部下において0.4cm~0.5cmで方形の断面形を呈し、先細りに造られている。このうち9、14、16、17、19、20の6点は完存する。また11、16、18、19、20には木質が残っている。頭部の形状は6・9は円形、8、11、13、14は楕円形、16は方形を呈す。22は板状の素材の一端を折り曲げたものであるが用途は不明である。

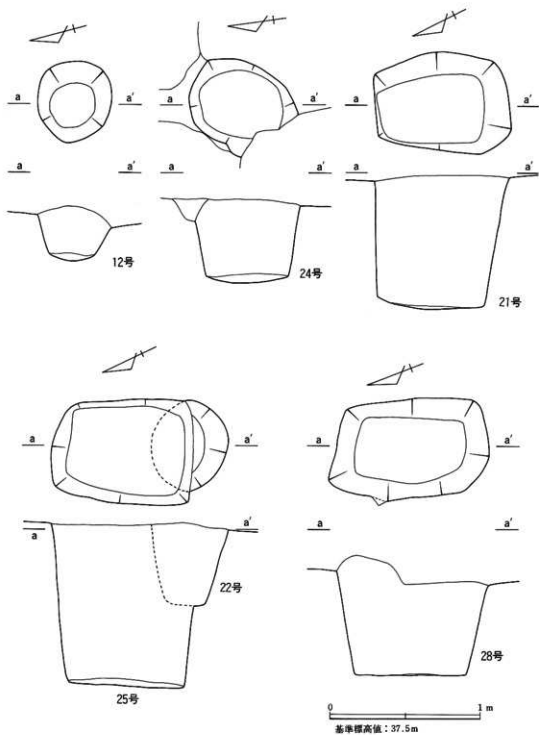
23は陶胎染付碗である。外面に唐草文が描かれている。大きさは口径10.3cm、器高7.4cm、畳付は露胎である。



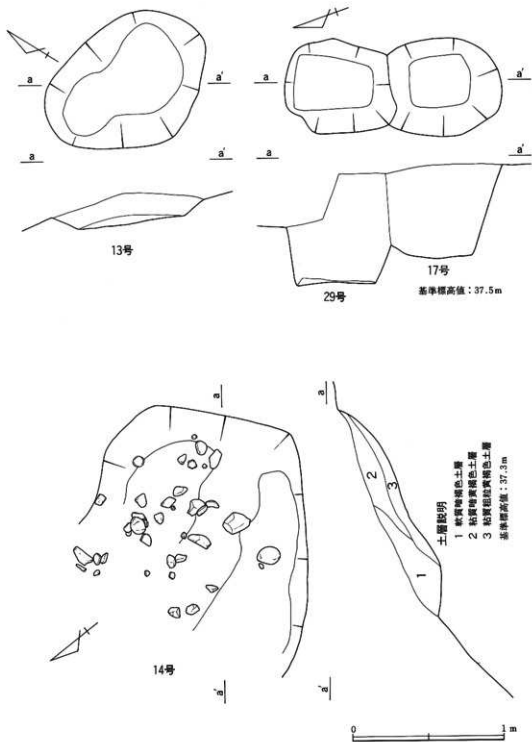
第52図 II区近世墓地内部主体実測図(1)



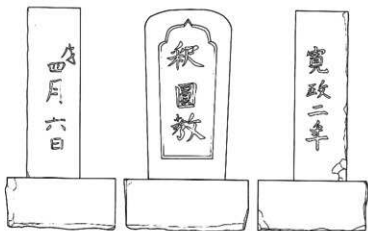
第53图 II区近世墓地内部主体实测图(2)



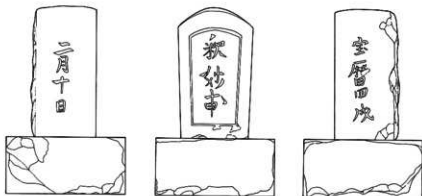
第54图 II区近世墓地内部主体实测图(3)



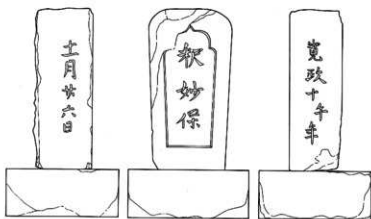
第55圖 II区近世基地内部主体実測図(4)



1号墓



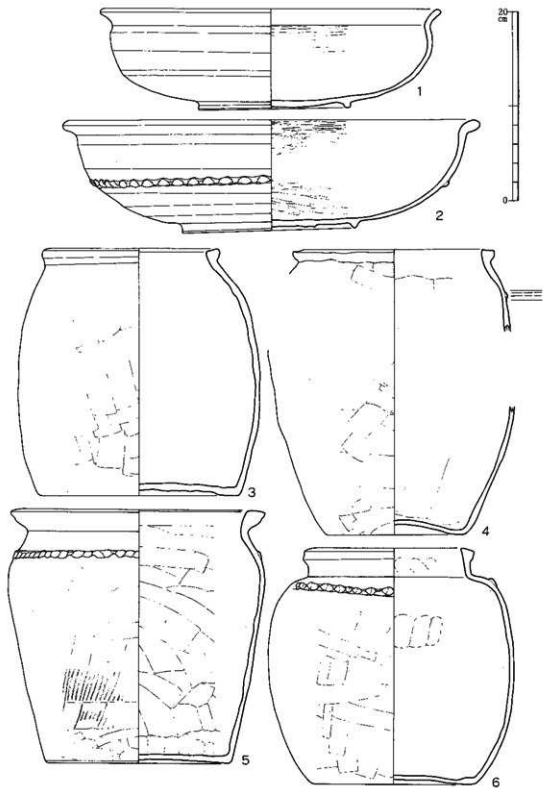
2号墓



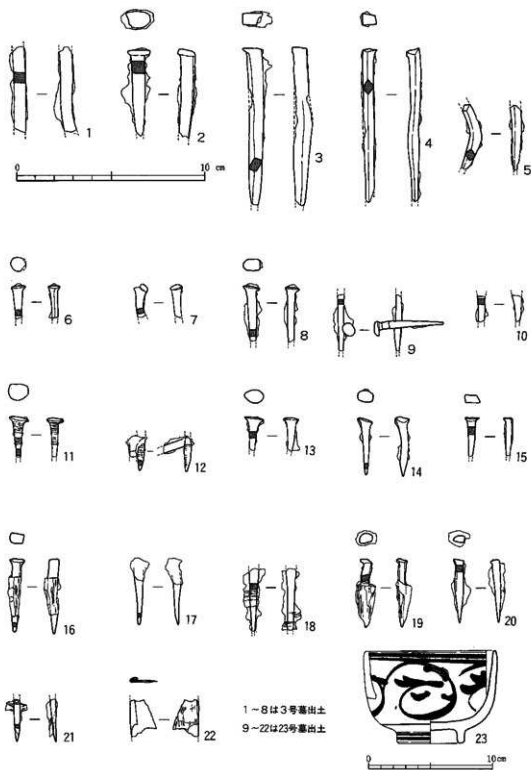
3号墓

0 40cm

第56图 II区近世墓地墓標実測图



第57图 II区近世墓葬藏器实测图



第58図 II区近世墓3・23号墓および周辺部出土遺物実測図

表4 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地一覽表

単位：m

墓番号	外部標識	下部施設	規模(長さ(長径)×幅(短径)×深さ)	備 考
1	墓石	——		2次的に移動か
2	墓石	——		2次的に移動か
3	墓石	方形墓坑	1.2×1×1.1	鉄製釘出土、24号を切断、礎
4		円形土坑	径0.3×0.2	地表に礎散在
5		骨蔵器	径0.57~0.6×0.13の円形楕形	コネ鉢利用、骨破片
6		方形墓坑	1.3×0.85×1.1	
7		骨蔵器	径0.5×0.27×0.15の円形楕形	甕利用、骨片
8		骨蔵器	径0.3~0.27×0.15の円形楕形	甕利用、骨片
9		骨蔵器	径0.72~0.65×0.11の円形楕形	コネ鉢利用、骨破片
10		円形土坑	径0.6~0.55×0.3	火葬墓?、地表に礎散在
11		骨蔵器	径0.3×0.12の円形楕形	甕利用、骨片、地表に礎散在
12		円形土坑	径0.5×0.54×0.36	火葬墓?
13		円形墓坑	0.87×1.17×0.2	
14		方形落込み	1×1.4×0.25	墓地関連施設?
15		円形土坑	0.3×0.31×0.07	骨破片、火葬墓?
16	配石?	骨蔵器	0.75×0.45×0.4の方形土坑	径約0.3の円形楕形を伴う、甕利用、骨片
17		方形墓坑	0.75×0.65×0.62	29号を切断
18		円形土坑	0.5×0.62×0.3	火葬墓?27号に切断
19		円形土坑	0.45×0.6×0.3	火葬墓?
20		円形土坑	0.4×0.5×0.2	骨片、火葬墓?
21		方形墓坑	0.9×0.65×0.88	
22		円形墓坑	0.5×0.6×0.55	25号を切断
23		方形墓坑	1.1×1.1×1.5	鉄製釘・金具出土、上部に礎
24		円形墓坑	0.7×0.55×0.55	3号に切断
25		方形墓坑	0.94×0.7×1.06	22号に切断、上部に礎有り
26		円形墓坑	径0.88×0.6	
27		円形土坑	径0.54×0.66×0.16	18号を切断
28		方形墓坑	1×0.65×0.6	
29		方形墓坑	0.6×0.75×0.72	17号に切断

第4章 遺構と遺物の検討

1 近世墓地について

桐ヶ追遺跡の近世墓地

桐ヶ追遺跡の近世墓地は、整地された範囲に3基の墓が造られていた。被葬者は袈裟金具や錫杖などの副葬品、墓標の銘文から修験者であることが明確となった。

修験者の墓については、17世紀中葉～後半の島根県松江市檜山古墓群（文献1）、京都府舞鶴市中山城跡（文献2）などの調査例が知られており、本例との比較ができる。

上部施設については、1号墓では盛土とこれを囲む円形周溝を確認した。2・3号墓には、1号墓のような施設は伴わない。盛土を伴う例は、檜山、中山例でもみられる。檜山古墓の場合、確認された17基すべての墓に盛土が伴い、高さは0.5m～1.3mである。中山城跡では6基の古墓が確認され、高さ0.5m程度の盛土がみられ、これに方形の浅い周溝が巡る。

下部主体は3基ともに土坑であり、規模と形態からすべて土葬と考えられる。釘は確認されていないので、桶形棺が想定される。檜山例では、桶形・箱形棺が用いられ、中山例では、棺に方形の櫃が使用されていた。葬法については、檜山例において、元禄7年の『意宇郡松江分井成山畑地帳』に「人焼場」、「山ぶし塚」の記載から、修験者の墓地が独立していたことが指摘されており、一般的な火葬が並存することも推察できる。一方、中山例では同一の丘陵上に火葬墓6基がある。先行する城跡との関係から修験墓と同時期に造られたものと考えられている。このような事例から、17世紀中葉以降に修験者の埋葬が土葬優位で行われた傾向を僅少な例ながら窺うことができる。

副葬品についてみると、檜山古墓では錫杖、銅鉢、袈裟金具、数珠をセットとして副葬している。中山城跡の墓地では、錫杖、銅鉢の出土が知られている。桐ヶ追例では銅鉢、数珠を欠くが錫杖、袈裟金具が副葬されており、修験者の墓に伴う遺物の一般的な構成をみせている。

墓地の造営時期については、墓標の銘文から年代を知ることができ、1号・3号墓出土の銅銭と併せて、墓地の時期を想定する材料とした。まづ、3基の墓標銘文が示す年代は1号墓が元禄2年（1689年）、2号墓が文化11年（1814年）、3号墓が寛延2年（1749年）と、60年・65年の間隔をもつ。銅銭は、1号墓出土例で最も新しいものが寛永通寶（新寛永背文一初鑄1668年）、3号墓出土では、寛永通寶（新寛永背元一初鑄1741年）が最も新しい。2基の墓坑から出土した銅銭のうち最も新しいものの年代は次に鑄造される銭の初鑄年から、1号墓が1700年、3号墓が1767年を下限とすることを一つの可能性として指摘できる。もちろん銅銭自体は新規の銅銭が鑄造さ

れた後も流通しており、鑄造期間と流通期間が単純に合致するものでないことは十分に考慮しなければならないが、1号墓の紀年1689年は銅銭の示す1668年～1700年と、3号墓の紀年1749年は銅銭の示す1741年～1767年とは矛盾なく対応するものといえる。これから類推すると、2号墓の墓碑銘文も被葬者の没年を示すものといえよう。したがって、墓碑に刻まれた没年は、3基の墓の被葬者それぞれにあてることができると考えられる。

被葬者は出土した輪宝型の金物が磨紫金袈裟に使用されることから、当山派に属す。また墓標の銘文にある「大越家高林院養須大徳」の大越家は当山派官位のうち第2位を示し、行者が生前に修行を積み重ねたことを墓碑に刻み強調したものである。高林院は院号あるいは寺名を示し、養須は「養順」という行者名を表したものと理解できる。大徳は僧を示す。また「大越家高林院養須大徳」は1、2号墓に没年の異なるもので同一のものが刻まれているが、これは襲名の結果と推察される。

峯添遺跡の近世墓地

墓地は28基の骨蔵器・墓坑で形成されている。整地された墓地範囲は北から1/3ほどが細く墓の分布しない平坦面が造られ、墓道的な機能と考えられる。奥に向かって幅が広くなり墓が密集する。骨蔵器を伴う火葬墓は、墓地範囲の中央部から北部にかけて東縁辺りに造られてる。火葬骨を伴う浅い土坑墓は骨蔵器の分布とはほぼ同一の範囲に造られている。一方土葬墓は深さ1m前後を中心とする墓坑をもち、墓地中央付近で火葬墓と重複するが、分布は南に向かって展開する。土葬墓は中央付近の火葬墓を一部切断する例があるものの、これを大きく破壊することなく構築されている。墓地の形成が連続的に行われたことを示している。

時期を知る資料は、3基の墓標紀年銘と骨蔵器に用いられた甕、コネ鉢のみである。墓標の年代は、1号が寛政二年(1790年)、2号が宝暦四年(1754年)、3号は寛政十年(1798年)となっている。土葬墓8基に対して、墓標の数は3基と少なく移動したものと考えられる。骨蔵器は、別項の検討のように17世紀後半～18世紀前半と考えられるものである。付近から陶胎染付碗が出土していることも参考となろう。

この墓地の様相は、18世紀中頃から火葬から土葬へと葬法が変化したことを示すものといえる。これに対して、院内町広瀬墓地では18世紀～19世紀前葉を通じて火葬が確認されており、葬法に差があることを確認した(註1)。

<文献>

- 文献1 近藤正「V松江市・権山古墓群」(『鳥根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅴ集』鳥根県教育委員会、1971年)
文献2 竹原一彦「3.中山城跡」(『京都市遺跡調査概報第10冊』(財団)京都市埋蔵文化財調査研究センター、1984年)

<註>

- 註1 県文化課原田昭一氏の指示(「広瀬遺跡」)「一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」大分県教育委員会、1991年)
* 修験関係の遺物や墓標銘文については、東京国立博物館有史室の時枝務氏、立正大学文学部池上悟氏、立正大学大学院博士課程松原典明氏に多大なご教示をいただいたことを明記しておきたい。

2 峯添遺跡近世墓地の骨蔵器について

峯添遺跡では近世墓地の調査が行われ、納骨容器として素焼きの甕やコネ鉢が使用されているのが確認された。いずれも上部施設として墓標を持たず、直接的に年代を決めることは出来ないが、墓地の形成（骨蔵容器を持つものの集中性など）や葬法の変化（火葬から土葬へ）を考慮すると、この種墓制は17世紀後半から18世紀前半までに納まる可能性が高い。それを証するために骨蔵容器そのものの年代を考えてみたい。ただし、紙幅が限られているのでここではコネ鉢の型式変化について結論的に触れるに止め、他は後日を期したい。

コネ鉢という呼び方は、その使用状態（粉をこねる）から付けられたものであり、考古学的には形態から浅鉢と呼称するものである。高台をもち小さく口縁部が外反する浅鉢は、16世紀後半に瓦質のものが存在する。口縁部に突帯を巡らせ、花文などのスタンプ文を持つ深鉢形の火鉢や、内面底部に花文状に摺り目を施す摺鉢などと共存する。基本的には口縁部を明瞭な稜線を持って小さく外反させるか玉縁状につくる。この瓦質のものは17世紀前半まで残る可能性があるが、良好な資料がなく不明である。

17世紀後半から18世紀前半には素焼き（土師質）のコネ鉢が出現する。溝一括資料の珍珠町小芋遺跡、共存資料はないがこの時期の墓地を形成する中津市ガラヌノ遺跡出土のものが該当する。いずれも口縁部が「く」字状に外反し、肥厚しない。胴部はやや張る。以後の資料も同様であるが、外面はヘラ削り、内面はミガキである。

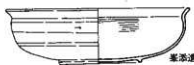
これに続くものとしては、19世紀前半の宇佐市下林遺跡出土資料、幕末から明治期の山香町小武寺資料があるが、前者は直口の口縁部を大きく肥厚させるもので、後者はやはり直口の口縁部を折り返して幅広く肥厚させる。これらは胴部の張りがなくなる。さらにごく最近まで商品として売られていた資料も直口の口縁部を幅広く肥厚させるもので、これらの事例からすると少なくとも19世紀以降は、直口の口縁部が特徴となる。そうすると、三光村ズリヤネ城遺跡出土資料のゆるやかに外反し折り返して小さく肥厚させるものは18世紀後半におかれる可能性が高い。

このように型式変化が追えるとすると、峯添遺跡出土のコネ鉢の年代はいつに求められるであろうか。5号墓のものは口縁部が「く」字形に折れ、肥厚しない。さらに胴部も大きく張るなど、古式の様相をもつ。17世紀後半から18世紀前半に位置づけられよう。9号墓のものは口縁部が小さく「く」字形に折れ、やや肥厚する。胴部の張りが5号墓より小さく、後出の要素が多いが、ズリヤネ城遺跡出土のものに比較してまだ口縁部の折れが強く、18世紀後半まで下ることはなかろう。甕についてはいまのところ時期比定の根拠がないが、出土位置から見てコネ鉢と大きくは時期が違わないと考えられる。つまり、火葬墓の多くは17世紀後半から18世紀前半に納まるものと考えられるのである。

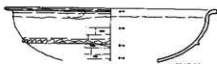
なお、これらの土器類の大部分はその形態からみて、宇佐市高村で焼かれたものである。



ガラマノ遺跡 (17世紀後半?)



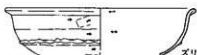
葦添遺跡



小竿遺跡
(17世紀後半-
18世紀前半)



葦添遺跡



ズリヤネ城遺跡 (18世紀後半?)



別府遺跡 (18世紀?)



下林遺跡
(19世紀前半)



小武寺遺跡 (19世紀末-20世紀初め)



民俗資料 (20世紀)

第59図 コネ鉢変遷図

第 5 章 自然科学的調査の成果

1 桐ヶ迫遺跡 2 号墳出土須恵器の脂質分析について^{※1}

埼玉大学 小池 裕子

<分析試料>

大分県宇佐市桐ヶ迫遺跡 2 号墳の墳丘から、蓋つきの須恵器の坏が 4 組出土した。これらのうち、2 組の須恵器について、坏内に貯蔵あるいは埋納していたものの推定するため、No. 4 坏身 (569-1) と No. 6 坏身 (569-2) の脂質分析を行った。抽出の際、坏の内部と外部に抽出液を浸漬したが、そのうち坏身内部の抽出液のみを分析対象とした。

またこれらの須恵器には土壌がほとんど充填していなかったが、須恵器内面に付着していた粘土状の土壌を採取し、No. 4 坏身付着土壌 3.3 g (569-3)、No. 6 坏身付着土壌 0.9 g (569-4) を比較試料として分析した。

<分析方法>

試料からの脂質抽出および精製法は常法 (小池, 1990) により、クロロホルム-メタノール (2 : 1) を用い超音波抽出を行い、得られた全脂質を計量した。全脂質に 5 % HC 1-MeOH を加えメチル化し、ヘキサノ-ジエチルエーテル-酢酸 (80 : 30 : 1) を用いて展開した薄層板から、遊離脂肪酸部位とステロール部位をかきとり、濃縮して検出試料とした。

脂肪酸分析には 20% DEGS カラムを、ステロール分析には 2 % OV-17 カラムを用い、標準試料の検出時間を基準にして第 60 図に示す 17 種の脂肪酸および 9 種のステロールを同定した。

GC-MS 分析には、埼玉大学分析センターのガスクロマトグラフィー質量分析機 JEOL-GCMS-DX 303 を用い、Megabore DB 5 カラム、カラム温度 250°C の条件で分析した。

<全脂質抽出量>

分析資料から抽出された全脂質重量は、No. 4 坏身 (569-1) が 0.85mg、No. 6 坏身 (569-2) が 1.29mg であった。これらの全脂質を脂質重量にすると、No. 2 坏身が 0.28mg/100g、No. 6 坏身が 0.43mg/100g となり、ともに土器としてはかなり低い抽出率であった。また土器付着土壌では No. 4 坏身土壌 (569-3) が 0.01mg、No. 6 坏身土壌 (569-4) が 0.02mg で、ともに分析限界であった。

※1 本原稿は 1991 年 3 月に送付されたものである。

<脂肪酸組成について>

今回分析した須恵器の脂肪酸組成・ステロール組成を第59図に示す。No. 2 坏身の脂肪酸組成は中級脂肪酸を主体とし、土壌によくみられるC22以上の高級脂肪酸は検出されなかった。中級脂肪酸の中ではC18:1が40%を占め、それにC16:1・C18:1・C16:1が伴うのを特徴とし、飽和脂肪酸のC18:0はわずか3%であった。

No. 6 坏身の脂肪酸組成もNo. 4 坏身と同時に中級脂肪酸を主体とし、C18:1が40%以上を占め、C16:1・C18:1・C16:1が10～20%、C18:0は約3%であった。

一方土器付着土壌では、No. 4 坏身土壌試料およびNo. 6 坏身土壌試料ともに須恵器試料の脂肪酸にくらべ、飽和脂肪酸のC16:0やC18:0がやや増加するものの、ともに中級脂肪酸を主体にし、土壌特有の高級飽和脂肪酸はあまり検出されなかった。

<ステロール組成について>

ステロールのガスクロマトグラムに示すように、No. 4 坏身試料からは有効なステロールが検出されなかった。No. 6 坏身試料からはコレステロールとステロール分解物と考えられるコレスタノンが検出された。これらの須恵器からは、土壌試料によくみられる飽和型ステロールは認められなかった。

GC-MS分析によって、No. 6 坏身のステロールの各ピークを調べたところ(第61図)、コレステロール(分子ピーク386)の存在をスペクトルで確認することができた。従って、なんらかの動物性食糧が関連していたと推定される。

土器付着土壌では、No. 4・No. 6 坏身土壌ともに有効なステロールは検出されなかった。

<考 察>

No. 4 坏身試料 (569-1・3)

この試料の脂肪酸組成はC18:1が40%、C16:1・C18:1・C16:1が10%前後で、動物物の脂質に特徴的な脂肪酸を主体とした脂肪酸組成を示した。この試料からは有効なステロールが検出されなかったため、このような脂質が植物質なのか動物質なのか直接推定することはできないが、このような条件でコレステロールが検出されなかったことから、動物性脂質の可能性は低く、どちらかという植物性の遺物の可能性が考えられるであろう。

No. 6 坏身試料 (569-2・4)

No. 6 坏身の脂肪酸組成もNo. 4 坏身とよく似た脂肪酸組成を示したが、ステロール組成では動物性ステロールのコレステロールが植物性ステロールを伴わずに単独で出現したことから、動物性脂質が相当量存在していたものと推定される。またコレスタノンがかなり含まれていたことは、

このような脂質組成のとき注意しなければならない人の手の汚染によるコレステロールと中級脂肪酸の検出ではなく、コレステロールが変成してコレスタノンになったと考えられる。

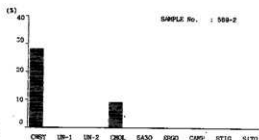
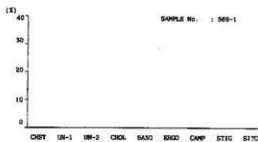
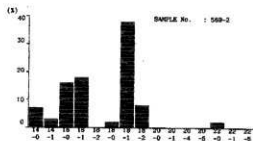
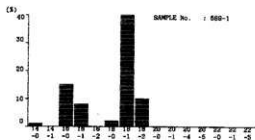
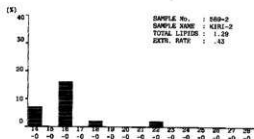
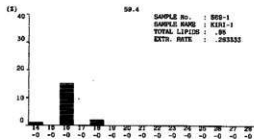
<参考文献>

小池裕子・土屋朋子 (1988) 水産動物の脂肪酸組成について。埼玉大学紀要 (自然科学編)、24 : 55 - 72

瀬川裕一郎・小池裕子 (1990) 煮鰯魚と鍋型土器・覚え書。沼津市博物館紀要 14 : 1 - 19

小池裕子 (1990) S1 - 038A 住居覆土と出土土器の脂質について。「一般国道 4 号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過」、25 - 30

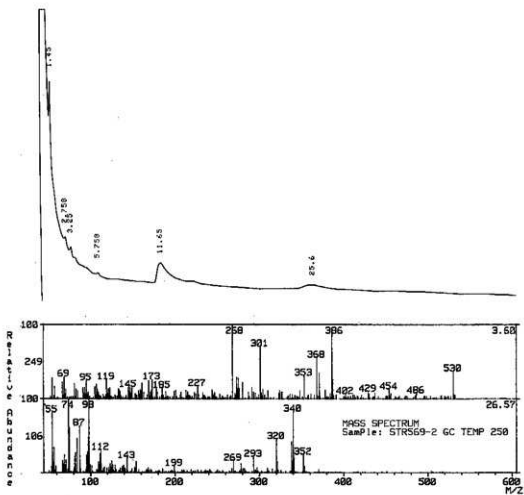
小池裕子 (1991) 有用植物のステロール組成について。埼玉大学紀要 (自然科学編)、26 : 13 - 29



(桐ヶ迫遺跡 2号墳出土須志器)

0 10cm

第60図 桐ヶ迫遺跡 2号墳出土No. 4 坏身 (569-1) とNo. 6 坏身 (569-2) の脂質分析。
 上段：飽和脂肪酸、中段：不飽和脂肪酸、下段：ステロール組成



第61図 桐ヶ泊遺跡2号墳出土No.6 坏身(569-2)のステロールにおけるクロマトグラムとGC-MSスペクトル。

2 峯添遺跡Ⅱ区近世墓地出土人骨について

九州大学 金 寧賢・田中 良之

本遺跡では近世墓6基から人骨が検出された。いずれも火葬骨であり、保存不良で碎片となっている。また、火葬による変形も著しく、計測はおろか年齢・性別等の鑑定に耐える個体も少ない。

以下、遺構ごとに記載する。

5号人骨

筆者らの手元に送られてきた資料は、歯根3点のみであった。歯根も先端の部分だけであるため、歯種の判定も不能であった。したがって、年齢・性別とも不明である。

7号人骨

頭骨および上下肢の破片を認める。

頭骨は、前頭骨と右頭頂骨の小片が認められた。矢状縫合は開離する。他に小臼歯の歯根が認められたが、それ以上の部位は判定できない。

上肢は、前腕と思われる破片がみられたが、熱による変形が著しく、部位の特定はできなかった。

下肢は、左右寛骨と左右大腿骨の一部がそれぞれ認められた。そのうち左寛骨は、腸骨耳状面・弓状線を含む部位であったが、前耳状溝は認められなかった。大腿骨は、左右とも骨体部であるが、右は遠位、左は近位である。とくに右大腿骨は、火葬による変形はあるものの、粗線の発達を認めることができた。

以上のように、大腿骨粗線の発達からみて男性であった可能性が高いと考えられる。また、寛骨前耳状溝が認められなかったことも、消極的ながら、この性判定を支持する。年齢判定に有効な所見はないが、矢状縫合が開離していることから高齢ではなく、大腿骨の厚みや太さからみて小児以下でもないと考えられることから、成年か成人に迫る若年の個体であったと推定される。

8号人骨

頭骨と四肢骨の破片が認められた。

頭骨は、小片のみであるため部位の判定が困難であり、わずかに後頭骨（左乳突縫合、外後頭隆起の部分）のみ部位が判定できた。外後頭隆起はやや発達する。歯牙は、切歯から小臼歯にかけての歯と思われる歯根が2点認められたが、歯種の特定はできない。

上肢は、右上腕骨の三角筋粗面および外側縁の部分が確認されたが、他は小片のみである。熱による変形はあるが、三角筋粗面は発達していたものと思われる。

下肢は、大腿骨骨体の破片が多くみられるが、左右の判定はできない。破片ではあるが、粗線の発達が認められた。

以上のように、上腕骨三角筋粗面および大腿骨粗線からみて、男性であったと推定される。年

齡については、骨質からみて成人に達していた可能性が高い。

11号人骨

四肢骨の破片が認められるが、部位の判定が可能なのはなく、年齢・性別とも不明である。

15号人骨

下顎大臼歯の歯根1点が認められるのみで、詳細は不明である。

16号人骨

頭骨および四肢骨の破片が認められた。頭骨は、右頭頂骨前頭縁の一部と後頭骨右乳突縫合の部分があり、冠状縫合・乳突縫合とも分離する。下顎は左下顎体が認められた。歯槽から得られる歯式は以下のとおりである



○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ・遊離歯 () 未明出

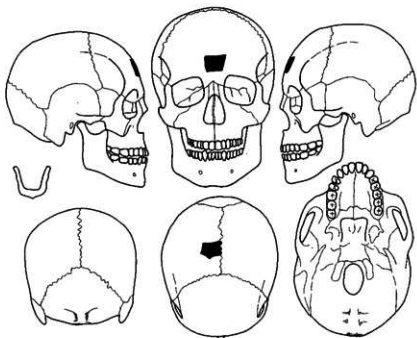
また、切歯～犬歯と臼歯の歯根がそれぞれ1点ずつ認められたが、歯種の判定はできなかった。

上肢は、右上腕骨骨体外側部と左上腕骨遠位が認められた。三角筋粗面は、発達した形状を示す。

下肢は、寛骨片が認められるが、小片のため部位の判定は不能である。大腿骨は、小片が多くみられるが、部位が特定できるのは右骨体遠位部のみである。残存した骨体から粗線の発達が確認された。脛骨は、小片が多くみられたが、部位の判定はできなかった。また、左膝蓋骨片も認められた。

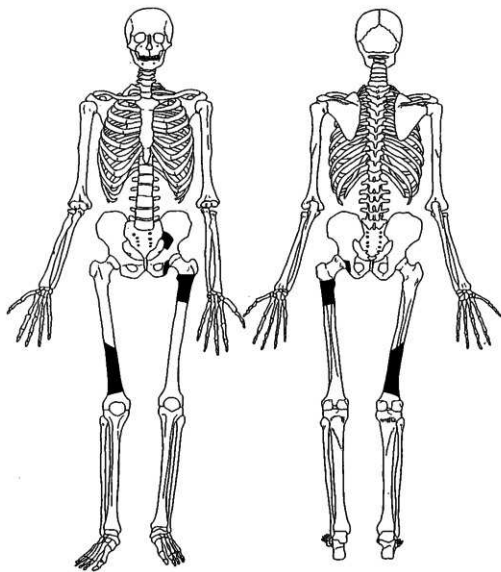
以上のように、上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線の発達からみて男性であると推定される。性別については、冠状縫合・乳突縫合とも分離することから熟年には達しておらず、骨質からみて成人かそれに近い若年より若くはない。したがって、若年後半以上で成年の域に収まる幅であろうと思われる。

以上、峯添遺跡出土近世火葬骨について記載してきた。ほとんどが火葬のため小片となっており、わずかに7・8・16号の3体の性別が推定されたにとどまった。全体的に人骨の分量が少ないという印象があり、少量が捨骨され、残りの多くの部分が遺棄された可能性があるかもしれないが、保存条件等ほかの要因も考えなければならず、いちがいいにはいえないであろう。



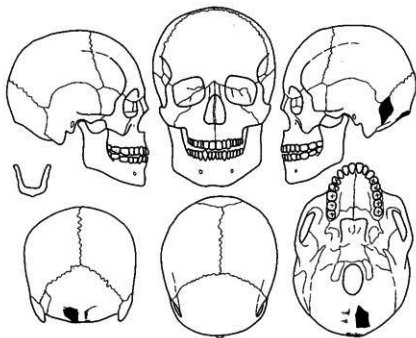
(黒塗り部分が遺存)

第62図 7号人骨頭蓋骨遺存部位



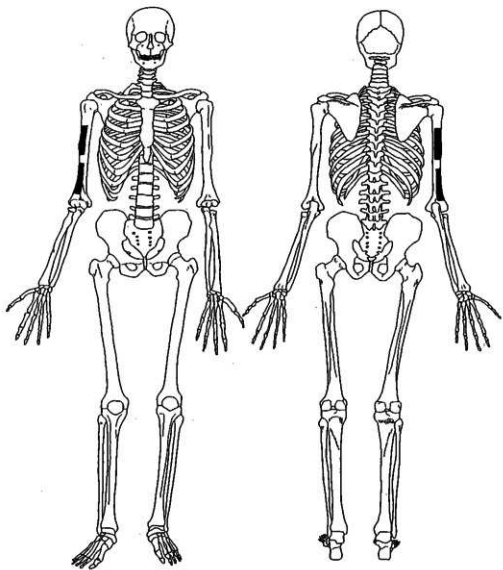
(黒塗り部分が遺存)

第63図 7号人骨遺存部位



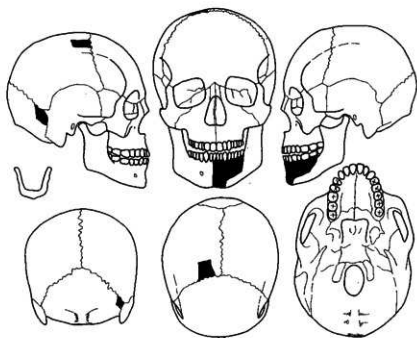
(黒塗り部分が遺存)

第64図 8号人骨頭蓋骨遺存部位



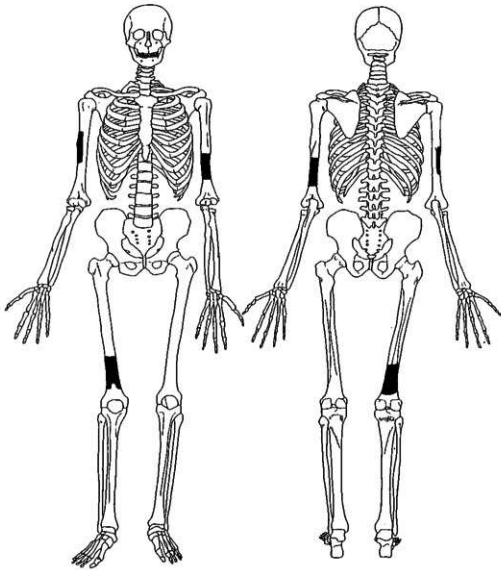
(黒塗り部分が遺存)

第65図 8号人骨遺存部位



(黒塗り部分が遺存)

第66図 16号人骨頭蓋骨遺存部位

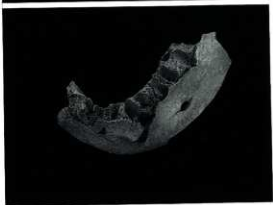


(黒塗り部分が遺存)

第67図 16号人骨遺存部位



7·8号人骨



8·16号人骨

SUMMARY

This report is the result of investigation of the Kirigasako and the Minezoe sites that was required prior to the construction of the Usa Bypass.

The staff of the Oita Prefectural Board of Education carried out the excavation in 1987-1990.

Kirigasako site

The position of this site is Kirigasako, Usa City in Oita Prefecture (N. Lat. 33° 31' 44", Long. 131° 18' 35"E).

We found a mound tomb in the latter half of the 6th Century, ash dump of Sue kilns in the latter half of the 6th Century, and modern graves dating the 18th Century.

MOUND TOMB in the Kirigasako site (late Kofun period-mid the 6th Century to latter half of the 6th Century) : This mounded tomb was located on many rice fields situated around it. This mounded tomb belongs to the "Circular Burial Mound" type. The mound was 10m. across. The burial mound was surrounded by a ditch. An underground facility, a stone chamber, was built of large stones and pebbles. It is called **CORRIDOR STONE CHAMBER**. It has a horizontal passageway at the side of the burial mound. This structure shows it was planned for several burials. To make this mounded tomb, first the former was dug and scraped into the shape. Then the burial chamber and mound were newly made. The stone chamber was partially destroyed in a later time so we can not exactly determine the completed shape. We do know it was 2 m. long, 1.5m. wide, and was smaller than any other type of these stone chambers. The mounded tomb was a special facility for the burial of a person of importance. In Japan, mounded tombs were regularly built from the latter half of the 3th. to 7th. Century. The **CORRIDOR STYLE STONE CHAMBER** was popular in the 6th. Century. Perhaps the mounded tomb Kirigasako held the remains of some person who was highly thought of by those who crafted the "Sue Pottery" Kilns distributed around this mounded tomb.

MODERN GRAVES found in the Kirigasako site (early 18th. Century to late 18th. Century). These features were located on a hill overlooking a plain. The hill was scraped to make a flat level area. In this burial area three features consist of two burial pits and one burial pit with mound that surrounded by a ditch.

Three head stones remained near this area. On these head stones the notes showed the rank in Buddhist at the time of his life, and the date of death were engraved. And we found relics that were Shakujiyo i. e. metal decoration of stick for Buddhist, metal fittings of vestment and coins. We could allow that buried persons were Shugensha (one of buddist groups). These graves shed light on the phase of Buddhist burial type.

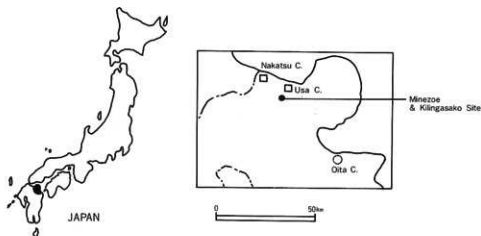
Minezoe site

The position of this site is Minezoe, Usa City in Oita Prefecture (N. Lat. $33^{\circ}31'30''$, Long. $131^{\circ}19'E$).

1 area We found a house pit and relics of late palaeolithic period (about B. P. 15000). This example is very rare, important.

2 area We found house pits and relics of late Kofun period (latter half of 6th Century), one cremation grave and modern graves.

MODERN GRAVES found in the Minezoe site (latter half of the 17th. Century to late the 18th. Century). Modern graves consists of 6 urns and 21 burial pits. It is highly probable that those buried here were farmers.



報 告 書 抄 録

ふりがな	まりがきこいせき		みねぞえいせき						
書名	桐ヶ迫遺跡・峯添遺跡								
副書名	一般国道10号 宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	(2)								
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	小林 昭彦								
編集機関	大分県教育委員会								
所在地	〒870 大分県大分市府内町三丁目十番一号 TEL 0975-36-1111								
発行年月日	西暦 1994年3月								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
桐ヶ迫	大分県宇佐市 大字山下	44211	⑨	33度 31分 44秒	131度 18分 35秒	19880808~ 19880901 19900528~ 19900204	7500m ²	道路建設	
峯添	大分県宇佐市 大字山下	44211	⑨	33度 31分 30秒	131度 19分	19871001~ 19871028 19880808~ 19880901 19900418~ 19910318	12000m ²	道路建設	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺		主 な 遺 物		特 記 事 項		
桐ヶ迫	墳墓ほか	古墳 近世	古墳 1基 近世墓 3基 灰原(須恵器窯跡) 1ヶ所	須恵器 土師器 玉類 銅銭 錫杖・袈裟金具	近世墓は修験墓				
峯添	墳墓ほか	旧石器 古墳 近世	竈穴住居 5基 近世墓 29基	旧石器 須恵器 土師器 近世陶磁器	旧石器時代の 住居1基				

出土遺物の写真番号は挿図番号と対応する

(第10図1 → 10-1)



桐ヶ迫遺跡（西上方向から）



峯添遺跡Ⅱ区（南上方向から）

2号墳遠景
(北西方向から)



2号墳全景
(北西方向から)



2号厩石付近
(北西方向から)



2号墳

左側壁

(南西方向から)



2号墳

墳丘内須恵器出土状態

(北東方向から)



2号墳

墳丘北西範圍

遺物出土状態

(西方向から)



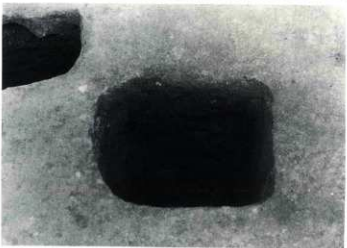
溝1、2全景
(西方向から)

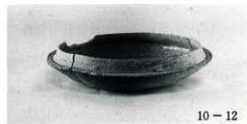


近世墓地
1号墓遺物出土状態
(西方向から)



2号墓完掘状態
(西方向から)









11-6



11-13



11-8



11-14



11-9



11-15



11-10



11-11



11-16



11-12





13-7



19-1



14-1



19-3



14-7



19-5



14-8



19-6



14-9



19-7

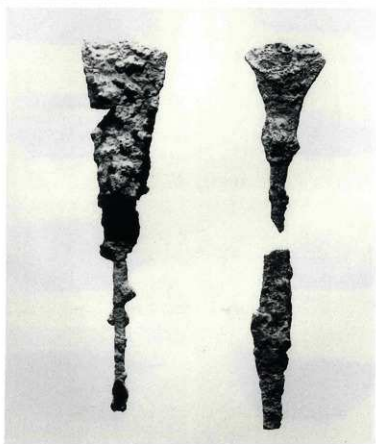
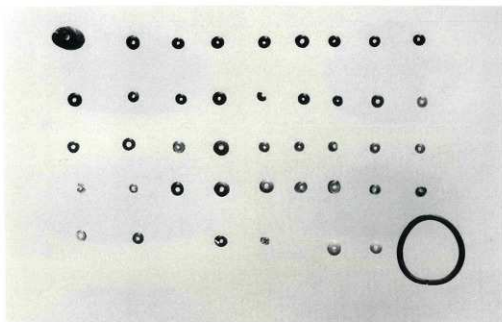


14-11

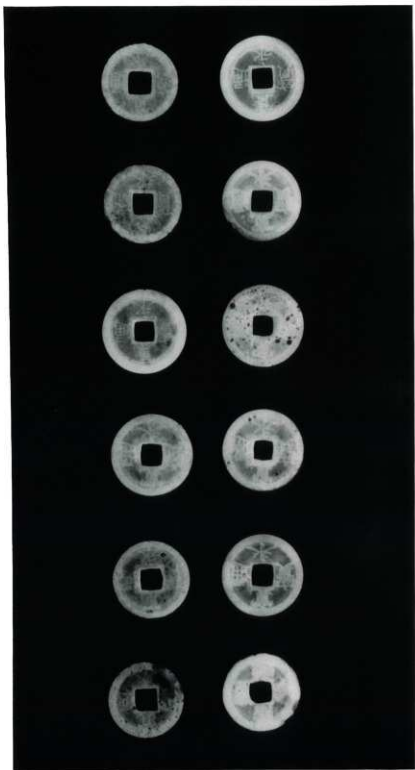


19-12

図版一〇 桐ヶ迫遺跡出土遺物(6)



図版 一一 桐ヶ迫遺跡近世墓地出土銅銭（X線写真）



I区

竪穴状遺構

(東方向から)



II区

1号竪穴

(北方向から)



1号竪穴

竈、遺物出土状態

(南方向から)



2号竪穴
(西方向から)



3号竪穴
(東方向から)



近世墓地
発掘前全景
(西方向から)



近世墓地全景
(北東向から)



近世墓地
完掘時空撮
(西上方向から)



8・7・11号墓
(東方向から)



5・9号墓
(北方向から)



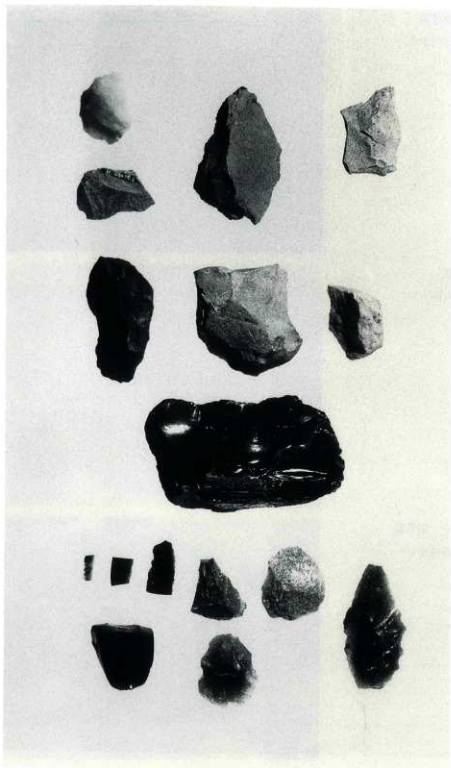
16号墓
(南方向から)



3・6・23号墓
(南方向から)



圖版一六 峯添遺跡I区竪穴状遺構出土石器及び関連資料





48-3



57-3



48-4



57-6



48-5



57-7



57-1

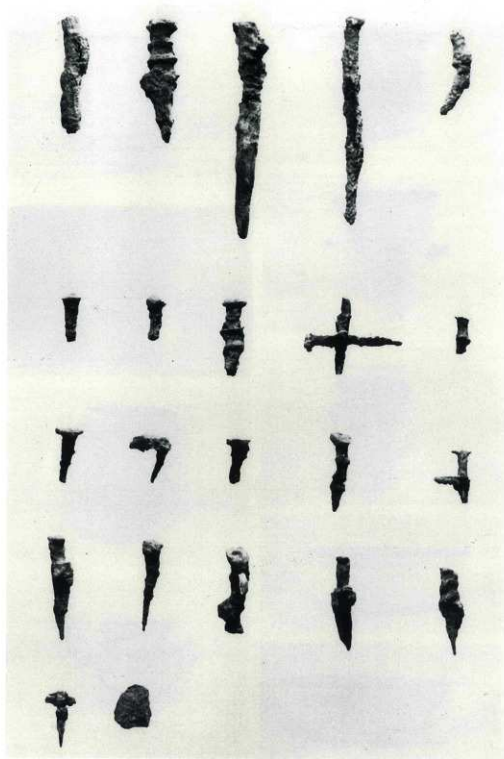


57-2



58-23

图版一八 崧泽遗址Ⅱ区近世墓出土钉



一般国道10号
宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

平成6年3月30日

編 集 大分県教育庁管理部文化課
発 行 大 分 県 教 育 委 員 会
印 刷 佐 伯 印 刷 株 式 会 社
